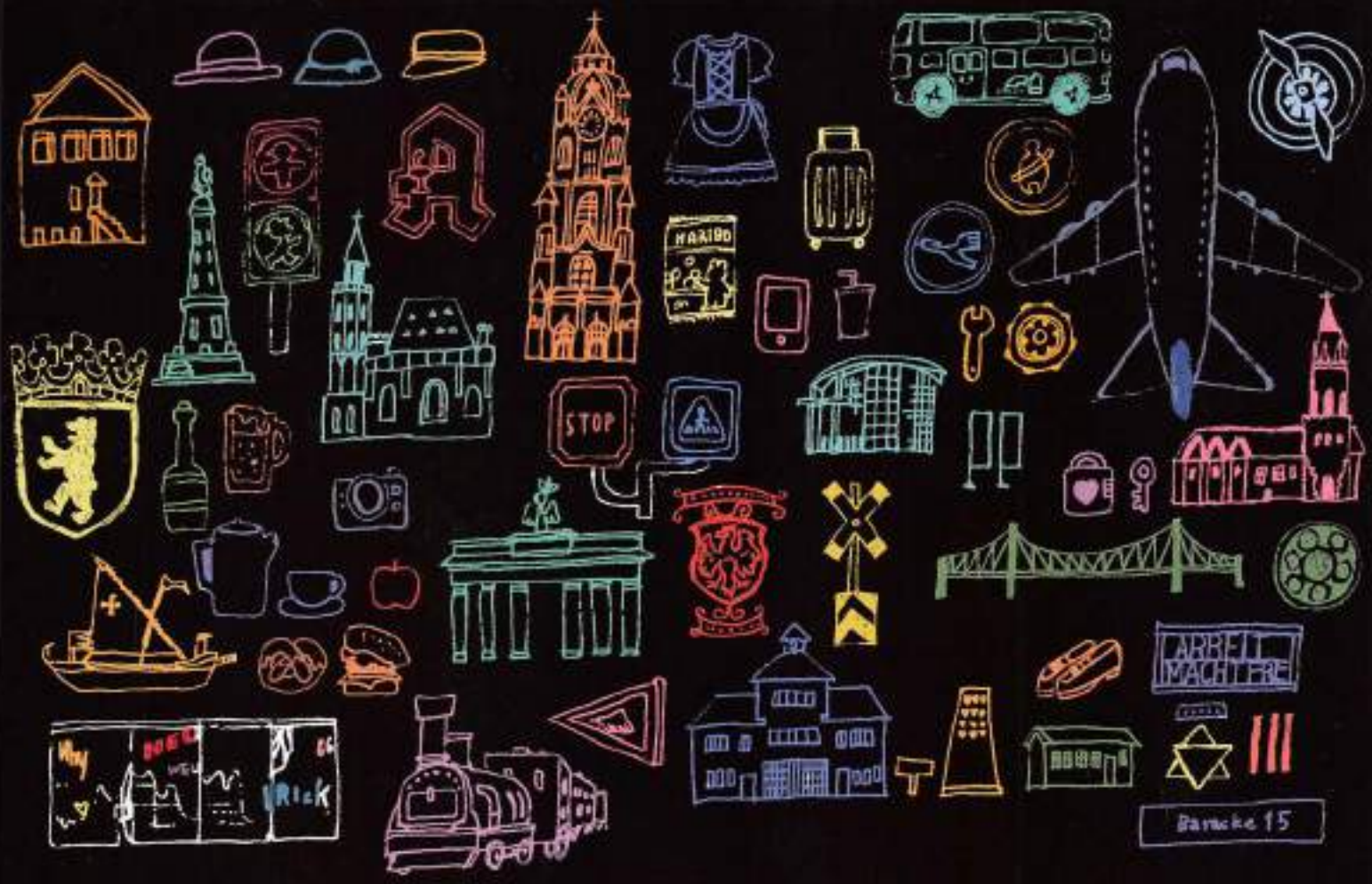
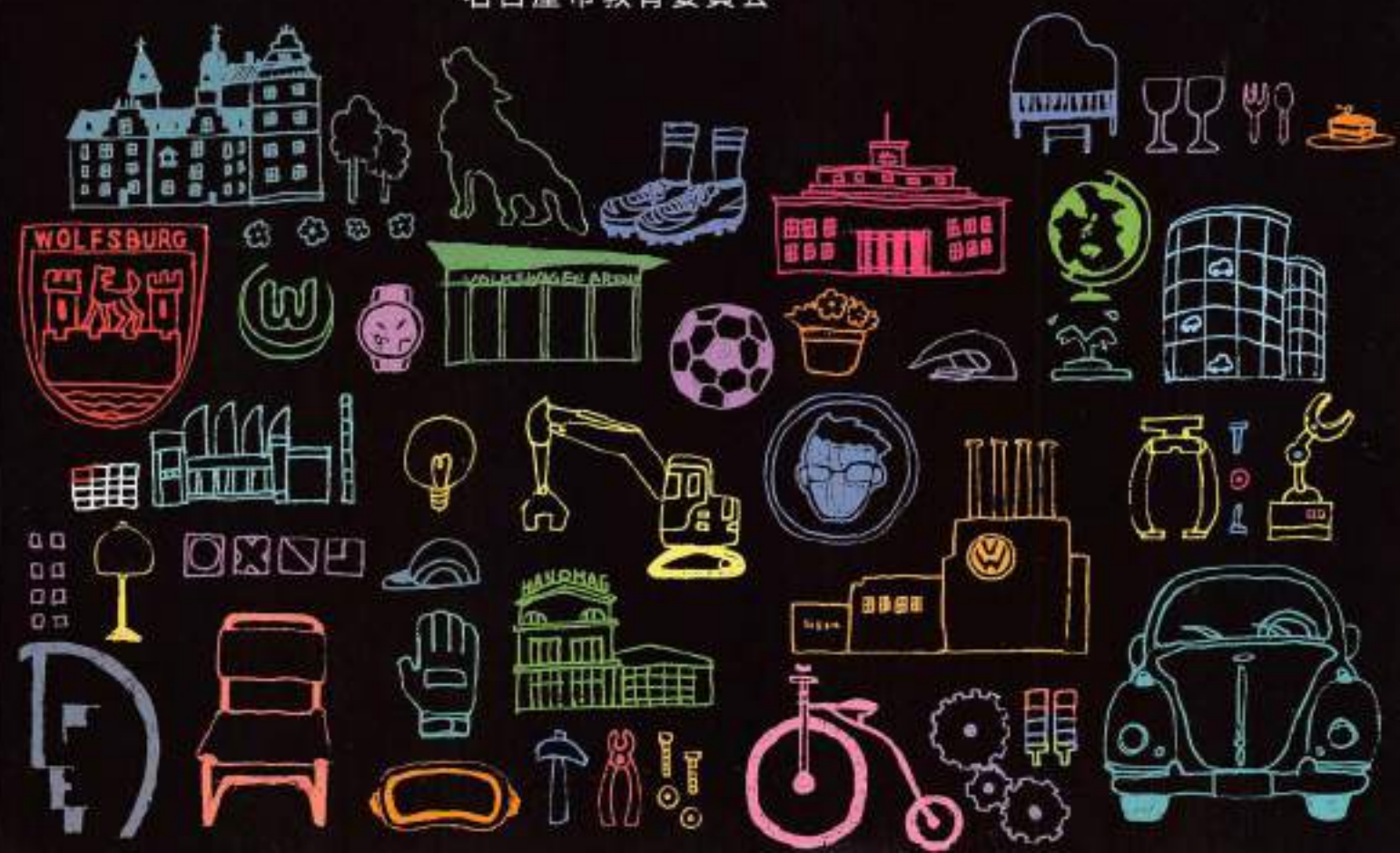


Neugierig 知ることに貪欲であれ ・未知の世界へ飛び込め！未来のスペシャリスト・

名古屋市立工業科高校生 ドイツ派遣報告書 2016

名古屋市教育委員会



tschland Deutschland

Überschrift

1 団長あいさつ … 3

2 工業・工芸高校のものづくり … 4-5

3 派遣団一覧 … 6-7

4 ドイツ派遣事業の概要 … 8-11

（1）研修実施場所

（2）海外派遣プログラム

（3）事前・事後研修

4 現地研修報告 … 12-34

5 研修を終えて … 35-55

6 編集後記 … 56

Bruno Monguzzi

Formelle Firmenzeichen

マークは、名古屋の象徴名古屋城天守閣の金の鯱と、ドイツの歴史・伝統・文化の象徴でもあり国章のイーグルを円に沿うように合わせることで交流を表現、色味は両国の国旗に共通する強い朱色が印象に残ります。キャッチコピーは、どんな些細なことでも知る謙虚さと積極さを、「neugierig」は強い好奇心や根掘り葉掘り、などの意味があります。
このマークとキャッチコピーは派遣生徒が考案したものです。

Design by　名古屋市立工芸高等学校 デザイン科３年 増田 波風

Neugierig 知ることに貪欲であれ

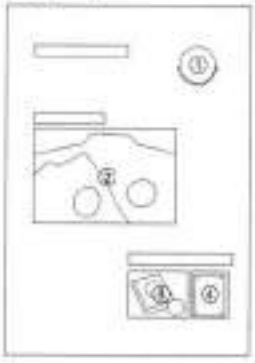
Formelle Uniform

①Formelle Firmenzeichen
公式ロゴ

②Formelle Uniform
公式ユニフォーム

③Brosche
記念ピンバッチ

④Gedächtnisteller
記念プレート



ロゴマークをワンポイントにしたユニフォーム。
ユニフォームの色は白と黄色。
特に黄色は、ドイツの街中でも特に目立ちました。

① yellow
希望とポジティブ

黄色は、光の印象の連想から来る希望や上昇志向、やる気をもたらします。知性や好奇心、理解力を刺激し、知的能力を動けます。不安や自信のさなを解消し、元気づけます。五感に働きかけ、ユーモアとユニークさも表現します。

② white
純粋無垢と憧れ

白色は真面目さと謙虚さを、また敬意と憧れのイメージを持ちます。混じりけのない潔白性は仕事に余分なものが入り込まない、ものづくりの考え方にも繋がります。

Brosche & Gedächtnisteller

ピンバッジと記念プレートは公式ロゴをメインに制作しました。
訪問時の記念品として、コミュニケーションの橋渡しとなりました。

団長あいさつ

今年度（平成 28 年度）、名古屋市教育委員会は、「名古屋市立高校生の海外派遣事業」として、名古屋市立工芸高校・工業高校の生徒 20 名をドイツに派遣しました。この派遣は、現地企業で実地研修及び産業施設の視察を行い、グローバル社会の変化に主体的に対応できる専門的技術を持った人材を育成することを目的としています。

現在、両校で学ぶ生徒たちは、これからの日本のものづくりを担う、企業の第一線で活躍する人材です。ものづくりの現場で、現物に触れ、現象を観察しながら自ら問題を解決し、創造性・探究心を発揮していく能力を身につけるために日々努力しています。

派遣団の生徒たちは、フォルクスワーゲン社、コマツ・ハノマーグ社の訓練生たちと訓練を積み、ものづくり大国であるドイツの「ものづくり精神」に触れ、大いに感化されました。また同時に、日本の「ものづくり」の素晴らしさ・魅力について再認識し、今後の技術・技能の向上に邁進していくと考えています。

工芸・工業の両校は、「ものづくりはひとづくり」と考え、工業に誇りをもてる、将来の優秀な技術者の育成に努めています。今後も、ドイツでの研修成果を、社会の様々な場面で還元し、工業教育の発展や地域の活性化等に取り組んでまいります。

最後に、派遣事業を実現していただいた、名古屋市教育委員会をはじめ関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

石原正道　Masamichi ISHIHARA

名古屋市立工芸高等学校　校長
Nagoya Industriekünste Ältere Höhere Schule Rektor

「NADIOS」
Web Site

工業高校は、教育方針の柱である「独創」と「進取」の精神により日本の工業技術の発展に打ち込み、貢献できるよう実践的な教育を推進している。

高度な専門知識や技術を先駆的に取り組み、日本の産業の柱を支える人材を育てており、産業界や地域から厚い信頼を得ている。

「英知」と「夢」

日本の産業を支える技術者の育成と「ものづくり技術」で地域貢献

基本データ

名古屋市立工業高等学校

- 創立
  1936年（昭和11年）
- 所在地
  名古屋市中川区
- 設置学科
  機械、電子機械、自動車、電気
  情報技術、環境技術
- 教育目標
  独創・進取の精神を磨き、剛健・不撓の魂を鍛え、自ら考え、行動できる資質や能力を育てる。

実践教育に力を注ぎ、様々なものづくりを行っている

「挑戦」と「連携」

デュアルシステムによる世界基準の技術者育成と「まちのデザイン事務所」による地域貢献

工芸高校は、教育方針の柱である「挑戦」と「連携」によって魅力ある様々な教育活動を行っている。

高度な技術・技能を習得させる工芸版デュアルシステムの導入、技能五輪全国大会への出場、日頃の学習成果を地域・行政へ還元させる活動など各分野でめざましい成果を上げている。

デザイン教育にも力を入れ、様々な創作活動を行っている

基本データ

名古屋市立工芸高等学校

- 創立
  1917年（大正6年）
- 所在地
  名古屋市東区
- 設置学科
  都市システム、建築システム、インテリアデザイン、グラフィックアーツ、電子機械、情報
- 教育目標
  自分の道を、自分で考え、自分で選択し、自分で歩んでいく生徒を育てる

名古屋市立工業高等学校 Technische Höhere Schule

熊本地震緊急募金活動

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

Member of UNESCO Associated Schools

ユネスコスクール認定校

なかがわものづくりフェア

区民こども村ボランティア参加

「英知」で多様な視点から社会貢献

愛知県の工業高校で初のユネスコスクールに認定され、「思いやりテクノロジー」の理念を継承し、ＥＳＤ「持続可能な開発のための教育」に取り組んでいます。その実践として、教科・科目に反映させた防災教育を行うなど、東日本大震災に学び、復興に向けて全校の「英知」を結集しています。

また、地元企業や地域と連携して、ものづくり技術をいかし、地域の活性化とボランティア活動で貢献しています。

「夢」挑戦と工業版デュアルシステム

工業高校は、二宮忠八の「玉虫型飛行器」である人類初の有人飛行の「夢」を受け継ぎ、有人飛行に挑戦し続けています。さらに航空宇宙産業で活躍する人材育成にも力を注いでいます。

また、デュアルシステムでは、地元企業で１年間を通じて、高い技術・技能の習得をめざし、企業人としての自覚と心構えを身に付けさせています。工業高校生の若い力が地元企業の活性化にも役立っています。

有人飛行機

有人飛行機

有人飛行機離陸

デュアルシステムの様子

名古屋市立工芸高等学校 Industriekünste Ältere Höhere Schule

第 54 回技能五輪全国大会（平成 28 年度）の様子

技能五輪全国大会への「挑戦」

大会での活躍は、工芸版デュアルシステム、産学官連携による技術指導の成果のひとつであり、工芸高校としての技術・技能の向上に寄与しています。

工芸高校は技能五輪全国大会の常連であり、建築システム科では「建築大工職種」「左官職種」「木型職種」、情報科では「ウェブデザイン職種」「ビジネス業務用ＩＴソフトウェア・ソリューション職種」に出場しています。歴代の出場生徒たちは優勝、国際大会出場などの輝かしい実績を残しています。

技能五輪の様子

産学官との「連携」と地域への貢献

自治体・企業・大学・地域と連携・コラボレーションし、特色ある取組を行っています。特に生徒がデザイナー・プランナーになり、外部からの依頼を受け、提案や解決プランを提示していく「まちのデザイン事務所」プロジェクトは、高校生による地域活性化や地域貢献を実現しています。

これらの取組はアクティブラーニングの手法を採り入れることにより、創造力、思考力や課題解決能力が飛躍的に伸びています。

大曽根本通商店街活性化事業

動物愛護センター壁面制作

なごやかまつり・ひがしポスター制作

③ 派遣団一覧

名古屋市立工芸高等学校 Industriekünste Ältere Höhere Schule

藤井春香 Haruka FUJII
都市システム科２年

榊原規一 Kiichi SAKAKIBARA
電子機械科２年

伊藤遼 Ryou ITO
建築システム科３年

榊原匡泰 Masahiro SAKAKIBARA
建築システム科３年

増田涼風 Ryouka MASUDA
デザイン科３年

牧弥生 Yayoi MAKI
グラフィックアーツ科３年

荒田太雅 Taiga ARATA
電子機械科３年

亀山倫太郎 Rintarou KAMEYAMA
電子機械科３年

寺島敬吾 KeigoTERASHIMA
電子機械科３年

赤木友李夏 Yurika AKAGI
情報科３年

引率

石原正道
名古屋市立工芸高等学校

名古屋市立工業高等学校 Technische Höhere Schule

久保田信永 Nobunaga KUBOTAI
機械科 2 年

冨山恵吾 Keigo TOMIYAMA
自動車科 2 年

古川達也 Tatsuya FURUKAWA
自動車科 2 年

服部真季 Maki HATTORI
環境技術科 2 年

岩城諒汰郎 Ryoutarou IWAKI
機械科 3 年

服部翔真 Shouma HATTORI
機械科 3 年

内田裕二
名古屋市立工業高等学校

安藤翔太 Shouta ANDOU
情報技術科 3 年

内木朝子 Asako UCHIKI
情報技術科 3 年

伊藤 司
名古屋市教育委員会

山田智大 Tomohiro YAMADA
情報技術科 3 年

祖父江学人 Gakuto SOBUE
環境技術科 3 年

4 ドイツ派遣事業の概要

（1） 研修実施場所

1. フランクフルト
2. ルフトハンザアヴィエーションセンター
3. ベルリン
4. ハノーファー
5. コマツ・ハノマーグ社
6. ヴォルフスブルク
7. フォルクスワーゲン社職業訓練所
8. ヴォルフスブルク市役所
9. Neue Schule Wolfsburg 学校
10. BBS2 Wolfsburg 職業訓練校
11. Auto Stadt
12. フォルクスワーゲンアリーナ

（2） 海外派遣プログラム

8/18（木）
中部国際空港より出発
⋮ ルフトハンザドイツ航空
ドイツ / フランクフルト空港到着
フランクフルト市内観光

8/19（金）
ルフトハンザアヴィエーションセンター研修
ベルリン日本大使館訪問

8/20（土）
ベルリン研修
ベルリンの壁 / ザクセンハウゼン強制収容所 / 議事堂

8/21（日）
ベルリン研修
ドイツ技術博物館 / バウハウス資料館
ハノーファーへ移動

8/22（月）
コマツ・ハノマーグ社で研修
ヴォルフスブルクへ移動

今回のドイツ訪問は
世界中のワーゲン社の広報新聞や、地元の新聞に
記事が掲載されました。

● 派遣期間

2016年8月18日（木）－28日（日）

8/23（火）
フォルクスワーゲン社職業訓練所
ヴォルフスブルク市役所・市長表敬訪問

8/24（水）
Neue Schule Wolfsburg 学校訪問
Auto Stadt 訪問

8/25（木）
BBS2 Wolfsburg 職業訓練校
フォルクスワーゲンアリーナ視察

8/26（金）
フォルクスワーゲン社職業訓練所研修

8/27（土）
ヴォルフスブルク出発
⋮ ドイツ高速鉄道ICE
フランクフルト空港出発
⋮

8/28（日）
中部国際空港到着

（3）事前・事後プログラム

事前プログラム

事前研修

第1回　5月14日（土）工業高校

第2回　6月　4日（土）工業高校

第3回　6月11日（土）工業高校

第4回　7月16日（土）工業高校

第5回　7月29日（金）工芸高校
（ドイツ総領事館）

第6回　8月　1日（月）トヨタ自動車

第7回　8月　3日（水）フォルクスワーゲン
グループジャパン

第8回　8月10日（水）工芸高校
（ルフトハンザ
ドイツ航空中部支店）

第9回　8月17日（水）工業高校

ドイツの基礎知識（ドイツ総領事館より）

トヨタ自動車

ドイツ語研修

第　1回　5月30日（月）

第　2回　6月　6日（月）

第　3回　6月13日（月）

第　4回　7月　2日（土）

第　5回　7月　4日（月）

第　6回　7月11日（月）

第　7回　7月19日（火）

第　8回　7月28日（木）

第　9回　7月30日（土）

第10回　8月　2日（火）

第11回　8月　2日（火）

第12回　8月　8日（月）

橋本　悦子　先生

ディルク・ヘルター　先生

合同説明会・表敬訪問・報告会

5月27日（金）市立高校海外派遣
合同説明会
（教育館講堂）

7月09日（土）合同出発式
（教育館講堂）

7月20日（水）市長表敬訪問
（市役所正庁）

7月20日（水）市教育長表敬訪問
（市役所正庁）

9月　6日（火）帰国報告会
（市役所正庁）

9月23日（金）市長への報告
（市役所本庁舎第1会議室）

1月10日（火）海外派遣成果報告会
（工芸高校・工業高校）

1月20日（金）海外派遣成果報告会
（名古屋日独協会）

3月　3日（金）海外派遣成果報告会
（中部経済連合会）

市教育長表敬訪問

市長表敬訪問

帰国報告会

事後プログラム

事後研修

8月30日（火）工業高校
8月31日（水）工業高校

12月23日（金）工芸高校
1月　9日（月）工芸高校
1月14日（土）工芸高校

名古屋市長に報告

9月23日（金）市役所にて
名古屋市長河村たかし氏に
研修の成果を報告しました。
報告会の様子は中京テレビの
ニュースで放送されました。

各種メディアに掲載

ヴォルフスブルク地方の新聞とVW社内新聞に
名古屋市の工業高校生の訪問と
研修の様子が掲載されました。

2016年9月27日中日新聞朝刊16面に
研修の内容などが掲載されました。

※この記事・写真は中日新聞社の許諾を得て掲載しています。
2016年9月27日中日新聞朝刊16面

Bau
haus
#05

Volks
wagen
#07

Statd
#21

Berlin #02

届けます、ドイツの話

「現地研修報告」

視察・研修やドイツについて派遣団の生徒たちが伝えます

#01 ルフトハンザドイツアヴィエーションセンター視察
内木　朝子

#02 ベルリン視察
荒田　太雅

#03 日本大使館大使公邸訪問
久保田　信永

#04 ドイツ技術博物館視察
寺島　敬吾

#05 バウハウス資料館視察
牧　弥生

#06 コマツ・ハノマーグ社での研修
富山　恵吾

#07 フォルクスワーゲン職業訓練所での研修
祖父江　学人

#08 BB2 Wolfsburg 職業訓練校での研修
岩城　諒汰郎

#09 Neue Schule Wolfsburg での研修
榊原　規一

#10 Auto Stadt での研修
古川　達也

#11 市役所訪問
寺島　敬吾

#12 ユースホステルでの生活
服部　翔真

#13 ドイツの家庭に入って
服部　真季

#14 高速鉄道 ICE277 を利用して
山田　智大

#15 ドイツの産業について
安藤　翔太

#16 ドイツのデザイン事情
増田　涼風

#17 ドイツの教育事情について
亀山　倫太郎

#18 ドイツの環境について
赤木　友李夏

#19 ドイツの衣食住
伊藤　遼

#20 ドイツの建築事情
榊原　匡泰

#21 ドイツの街
藤井　春香

#01 ルフトハンザドイツ アヴィエーションセンター視察

報告者

内木　朝子
Asako UCHIKI

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

私たちはルフトハンザアヴィエーションセンター（ルフトハンザドイツ航空）で、主にアヴィエーションセンター内とルフトハンザが所有する飛行機の中を見学させていただきました。

ルフトハンザアヴィエーションセンターは、周囲に庭、建物内にも庭があります。この庭は「世界の庭」と呼ばれ、色々な趣向を凝らした各国の庭を忠実に再現しています。建物の外観はガラス張りの構造になっており、人が建物内のどこにいても光が入る設計になっています。しかし、この光は直射日光が入らないよう、太陽の光が適度に建物内に入る工夫されたガラスになっています。また、光がどこからでも入るので、照明代がほとんどかからないそうです。他にも、自動で換気する仕組みのため、センター内の室内が暑くなることはなく、涼しく快適に過ごすことができるそうです。人工の冷暖房を基本使用しないため、二酸化炭素の排出量もかなり低いそうです。

今回見学させていただいた飛行機は、サッカーワールドカップのブラジル大会で勝利したドイツ選手を迎えに行った飛行機でした。この飛行機はドイツのサッカーファンからとても大事にされているそうです。

ジェットエンジンには騒音防止のために特殊装置がほどこされ、普通のエンジンと違った構造になっています。エンジンに、騒音防止の特殊装置がある飛行機はこの飛行機だけです。この特殊装置を使用してから、飛行機の出す騒音を３０％減少することに成功したそうです。タイヤはとても大きく、溝に特色があり、何度も利用できるエコタイヤを使用しています。

飛行機内では客席の他に、コックピット、キャビンアテンダントの仮眠室など、普通では入ることのできないところも見学しました。客席はファーストクラス、ビジネスクラス、エコノミークラスに分けられ、エコノミークラスはプレミアムエコノミーに分かれます。

今回、ルフトハンザアヴィエーションセンターを視察して、私がどれだけ飛行機の知識がなかったのかわかりました。飛行機の座席にもランクがあること、飛行機に施される工夫の数々など私の知らないことばかりでした。

#02 ベルリン視察

報告者

荒田　太雅
Taiga ARATA

名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

ベルリンでは多くの施設を視察しました。日本とは大きく違った建築様式や、町並み、緑の多さに圧倒されました。言葉では表現できないものを見聞きし、体を通して体感しました。知らない世界へ飛び込んでいくことが、こんなに素晴らしいものだと思いませんでした。

■ザクセンハウゼン強制収容所跡

ベルリンの北部にあるこの収容所はナチス・ドイツが建設したもので、非常に重く苦しい雰囲気が立ち込めていました。最初の入口の門には、「ARBEIT MACHT FREI　ー働けば自由になれるー」という言葉が書かれており、暗に強制労働を示唆しているのが伝わりました。

施設内へ足を運ぶと、バラックが取り壊された後の広大な平地が目の前に現れました。最初に見学したバラック３８は、狭い部屋に共同の便所や風呂、多くのベッドが設置されており、収容されていた人々が如何に人権を無視した形で生活をさせられていたかが理解できました。

独房は政治犯や収容者の中でも統率力のある人々が収容され、ひどい拷問を受けて亡くなった人もいたそうです。建物周辺には拷問に使われた道具類も設置されており、人間の恐ろしさを痛感しました。

また、銃殺壕、焼却場のあるエリアでは、実際にその場に立った時には多くの哀しみが体を突き抜けていくようでした。亡くなった人々の思いがそのエリア一体に立ち込めているようにも感じました。

この場所を訪れ、同じ人間が、ここまで感情を失くして人を傷つける事ができるのかとその事実に圧倒されました。ここを訪れて、しっかりと歴史を認識し、負の歴史に対して人々がどう捉えているのかを、もう一度考えていく必要があると考えました。私にとってこの視察は生涯忘れることができない、とても貴重なものとなりました。

■ベルリンの壁

思っていた壁とは大きく違う印象を受けました。実際にこの目で見るまでは亡命者を絶対に逃さない要塞だと思っていました。しかし、意外にも壁は薄く、高さも３ｍ程度でした。私たちが見学した壁は議会議事堂の前に建っており、分断の象徴でもあったそうです。

その証拠に壁を隔てた東ベルリン側の建物には弾痕がありました。現在は壁のほとんどが撤去され一部が建っているだけでした。崩壊するまで東西で多くの犠牲者をだした壁が、今では多くの人の憩いの場になっていると感じました。短い見学でしたが、現地で見聞きした情報はインターネットや書籍だけでは絶対に得られないものでした。

#03 日本大使館 大使公邸訪問

報告者

久保田 信永
Nobunaga KUBOTA

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

大使館とは、国交のある外国に自国の特命全権大使を駐在させて、公務を執行する役所のことです。特命全権大使とは、一般的に大使と呼ばれる人のことです。我々派遣団はドイツの大使館で、八木毅特命全権大使と懇談する機会を与えていただき、非常に充実した時間を過ごすことができました。

私は、事前にいくつか質問を考えていました。中でも私が最も聞きたかった「海外で活躍するためにはどうしたらよいか」という質問に対して、大使からは「英語をはじめとした外国語を身につける必要がある」「いきなり大きなことを考えるのではなく、地道に進めていくことが大切」というアドバイスをいただきました。

私はただ外国語に興味があるということだけで、具体的な目標を定めていませんでした。しかし、大使の話を聞き、今後はもっと現実的で具体的な目標を定め、地道に進んでいくべきだと気づきました。

そして、大使は私たち若者に臨んでいることで、次のようにもおっしゃっていました。ひとつは、「目の前で起きていることに興味を持ち、自らの知識をより豊かにしようと努力すること」、もう一つは、「これからの社会で重宝されるであろう、英語力のある人材になるために、進んで学ぶこと」

私は、しっかりと外国語、特に英語力を習得するために、もっと世界に目を向けること。そして、様々な角度から情報を収集し、何事も吸収できる柔軟な姿勢を忘れないようにしたいと考えました。

今回の海外派遣で、大使とお会いすることが出来て本当に良かったと思います。なぜなら、海外で活躍する日本人の姿を目の当たりにできたからです。自分の意見を言うことの難しさや大切さを学べたこと、これから自分が何を頑張れば良いのか明確になったからです。

大使からいただいた数多くのアドバイスはどれも心に響くものでした。特に、「目の前で起きることに興味を持つ」というアドバイスは、簡単なようでとても難しいことであり、決して忘れてはいけないと強く感じました。私は一人の人間としてもっと成長して、再び大使にお会いできる日を夢見て、今後の学業に励んでいきます。

#04 ドイツ技術博物館視察

報告者

寺島　敬吾
Keigo TERASHIMA

名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

ドイツ技術博物館はベルリンにあり、自動車、鉄道、飛行機やカメラなどの歴史的に貴重なコレクションが展示してある施設です。ものづくりに携わる工業高校生にとって、様々なことを学習できる場所でした。私は、特に次の３点についてしっかりと学ぶことができました。

一つ目は技術の発展についてです。現在は、カメラはボタン一つで、正確に撮影することができます。列車は電気で走るのが現在では常識です。しかし、昔は、カメラは光の反射を利用し撮るのではなく写す、列車は電気ではなく蒸気でした。そこから現代に至るまでの技術発展の歴史をしっかりと知ることができました。

二つ目は戦争についてです。博物館には、戦争に使われた戦闘機や爆撃機、パイロットの装備などが所狭しと展示してありました。中でも戦時中に落とされた戦闘機の展示は、戦争がいかに激しく悲惨なものであったかを私たちに教えてくれました。また、ナチスドイツ時代の負の遺産である、ユダヤ人を強制収容所や絶滅収容所に運んだ列車も展示してあり、ドイツという国がいかに悲惨な歴史を忘れないように、そして繰り返さないようにしているのかよく分かりました。

三つめは日本との展示物や展示方法の違いについてです。日本の博物館は特定の工業製品を展示する場合が多いのですが、この技術博物館は、最も有名である鉄道や飛行機、船、カメラ、宇宙、科学、エンジン、コンピュータなど、メーカーなどにこだわらずに幅広い製品が展示してありました。

この博物館では、実際に私たちが体験できるものがたくさんありました。例えば、飛行機が飛ぶ原理を装置の中にあるミニチュアの翼と風を用い説明してくれたり、飛行機のシミュレータであったり、より展示物や専門分野のモノについて、興味を持ってもらい、理解を深めてもらうための工夫が各所に施されていました。特に私が関心を持った体験装置は、昔のカメラの体験です。それは、光を対象にあてて光の反射を利用するというシンプルなものでした。

私は事前に技術博物館の概要、歴史や展示物について調べていたので、目的をもってしっかりと見学することができました。

このような大規模な博物館は、日本にはありません。将来技術者を目指している私たちにとって非常に有意義な体験でした。もう一度、ドイツを訪れることがあれば必ず訪問したい施設です。

#05 バウハウス資料館視察

報告者
牧　弥生
Yayoi MAKI
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

バウハウスは 1919 年に設立され、近代の芸術に大きく影響を与えた学校で、資料館には、当時の作品が展示されていました。しかし展示品は 100 年前のデザインとは思えず、現在でも通用するようなデザインで、洗練されたものばかりでした。

なぜバウハウスのデザインは現在でも通用するのか、疑問に思いました。博物館のガイドさんから、バウハウスの教育理念やものづくりの方法を聞いて、理由がよくわかりました。

デザインについて深く考えていた当時の教師や生徒は、デザインの分野が現在より批判的であったにもかかわらず、新たな考えにオープンな姿勢で学んでいたようです。また、教師陣は抽象絵画のパウル・クレー、近代建築の巨匠ミース・ファン・デル・ローエ、グラフィックやプロダクト、アートに関する著名な人物ばかりで、ジャンルを問わずお互い切磋琢磨しながら近代化へと突き進むという芸術運動を進めていました。

バウハウスはドイツ語で建築の「家」の意味です。デッサウのバウハウス校舎の特徴は建物全体が非対称だということです。建物はアトリエ棟、技術訓練棟、管理棟、共有棟、学生寮と別れていますが、それぞれにコンセプトがあり、それぞれが別の形状をしています。上から見なければこの建物の意図が伝わらなかったため、説明時には俯瞰図が用いられました。

グロピウスの「全ての芸術は建築へと統合される」という提唱にぴったりな建築だと感じました。バウハウスは風土や民族を超えた近代モダンデザインの基礎となった場所です。当時は民主主義的考えで、「全てが平等であるべき」「皆の平等なデザインを使う」という考えのもと、できるだけ安価で無駄を省き、材料や部品の削減、大量生産できるものをつくっていました。しかし装飾はなくても、抽象的で美しいデザインを求めていました。

ランプもカバーやスイッチ等、必要最低限の五つの要素からできており、装飾はありませんでした。しかし、シンプルで丸い形に安心感があり、素敵なデザインになっていました。椅子も、当時はアール・ヌーヴォー様式など木製で装飾のあるものが多かったが、バウハウスではスチールパイプをフレームに使った新しい試みをしました。バウハウスにあるもののデザインがまったく古びていないのは、機能性と操作性、形の美しさなど、全て考えてつくられているからだということを深く感じました。

私たちも、将来のものづくりを担う工業高校生として、バウハウスのもつ考えを見習っていき、今後の技術・技能の習得に生かしていきます。

#06 コマツ・ハノマーグ社での研修

報告者
冨山　恵吾
Keigo TOMIYAMA
名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

コマツ・ハノマーグ社での訓練生との実習は、私たちの今後の学習活動に大きな影響があったと思います。訓練生の作業を視察した後に、一緒に実習をすることになりました。ボール盤での穴掘実習や、板金を加工したダンプ模型の制作を中心とした実習は非常に有意義なものでした。

非常に力強く、繊細に作業する訓練生の手は、まさに職人の手のように感じました。日頃の訓練の賜物でしょう。私も手先が器用で自信がありましたが、この作業では、私の方が学ぶべきものが多かったと思います。今後は、何事も向上心を持ってものづくりに取り組み、社会に出てからも日本の技術者のみならず海外の技術者にも、負けないように頑張ります。

訓練生との実習の他に、私たちが感動したことは、副社長の伴大輔さんとの懇談会でした。

伴副社長は、企業を変えていくことに「大きな企業では何か動かすのは難しい、しかし、知見と行動力を持って、ＰＤＣＡを少しずつ回すことで大きなものが生まれる」「変化することにアジャストしていく」「失敗を恐れない」等、まだまだ未熟な技術者である私たちに、将来の指針を示してくれました。私は、常に自分の考えを持ち、経験を積むことによって、少しでも伴副社長に近づくことができるのではないかと考えました。

また、サイモン・シネックの「優れたリーダーはどう行動を促すのか」のプレゼンを参考に、ゴールデンサイクル（why、how、what）の説明も受けました。「人は『何を（what）』ではなく『なぜ（why）』に動かされる。まず、whyから始めよう」
優れたリーダーは、why→how→whatの順で考えを伝えます。Why（なぜ）の大切さを再確認することができました。

最後に、私たちに求めるものとして、「今から社会の動きを見ること、その動きを見ることで社会への知見が広まる」「海外で活躍するには、まず言語力が大切、そして何より積極性が大事」とおっしゃっていました。伴副社長の思いに応えられるようにこれから高い意識を持ち、日々の生活を過ごしていき、重要な場面に直面した時は、教えていただいた考え方を思い出し生かしていきます。

ＱＲコードから
現地での研修の様子が
映像で見ることができます。

#07 フォルクスワーゲン職業訓練所での研修

職業訓練所は、私の学校の実習室とはスケールが違っていました。例えば、小型の工作機械は各個人に、プレス機等の大型機械はグループに一台割り当てられており、非常に充実した実習が可能でした。また、訓練生に割り当てられた課題も非常に難しいものでした。例えば、同形のプラスチックと金属の材質を判別する機械や、ボディーとエンジン部分が合体する生産工程をモデルとした機械を製作するというものです。5人で担当し、3か月で完成させるそうです。訓練生たちの「製作するのは大変だが、仲間と協力して製作したという喜びの方が大きい。やって良かったという気持ちの方が大きい」という言葉が非常に印象に残りました。訓練生たちは、行動や発言もしっかりとしているので、非常に大人っぽく見えました。私自身、見習わなければならないと痛感しました。

訓練所内はディスカッションする広いスペースが設けられており、訓練生と教員が議論している授業を見学することができました。このスペースは距離感がなく、質問や意見が出しやすい雰囲気になります。日本では、このような場所では、生徒が授まってしまい、なかなか議論できないのが実情だと思いますが、訓練所では、訓練生が積極的に議論に参加していました。ドイツでは、「発言しないとその場にいないのと同じ」ということを、事前研修で伺っていたので、その意味がよくわかりました。日本では議論になると消極的になってしまいますが、自分の意見、感じたことをすぐに発言することの大切さを小さい頃から学んでおくことが大切だと感じました。

訓練所では、得た知識をすぐに実践に移して体で覚えることを心がけており、理論と実習が同時に実施できる効率のよい方法がとられています。私の学校の授業でも同様の授業展開をしており、通ずるものがあると感じました。

私が一番気になったのは、訓練生がやる気に満ち溢れていたことです。それは、ドイツの経済は一人ひとりの技術力で成り立っていることを学校全体で考え、高度な技術力の習得に力を入れているからです。自分たちの技術が国を支えているという自覚、そのために熱心に勉強し技術力を向上しなければならないという姿に、私たち技術者として大いに見習わなければならないとこだと痛感しました。

ドイツの訓練生は自分の技術に誇りを持ち、私たちの想像以上の熱意をもって勉学に励んでいます。訓練生の姿を見て私は感化され、技術を学ぶことの楽しさを今まで以上に感じました。

報告者

祖父江 学人
Gakuto SOBUE

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

#08 BBS2 Wolfsburg 職業訓練校での研修

ＢＢＳ２は、「教育によってチャンスを掴む」を教育理念として、現在 3400 名ほどの生徒が在籍しています。

学校のカリキュラムは、大学進学を目的としたコース（ギムナジウム）、技術者を養成するコースなどがあります。また、５日間学校に通う全部的登校と１日～２日学校に通う部分的登校というシステムになっています。

広い土地に歴史のある校舎から近代的な校舎まで、多くの校舎が配置されています。また、２ｋｍほど離れた別の敷地には、基礎力を身に付けていない生徒のために基礎学習を行う校舎があります。そこで、しっかりと基礎力を身に付けた生徒は本校舎に戻ることができるそうです。

ＢＢＳ２は先進的な教育を行っており、ヨーロッパにおける環境学校と言われるほど、エネルギー問題や環境汚染問題に取り組んでいます。また、ドイツで進められている「インダストリー 4.0」のコンセプトである「スマートファクトリー」（考える工場）やＩｏＴにも積極的に取り組んでいることに驚きました。

実際に生徒たちが研究しているシステムを体験させてもらいました。スマートホンで機械を制御して製品を作り上げていくもので、スマートホンの操作で無人で管理できます。このシステムは 13 人の生徒が、５か月間ほどで完成させたそうです。

ドイツの教育制度は、国として教育制度が統一されておらず、16 の州でそれぞれ制度を決めていています。現在は、学校独自で決めることもできるようで、どのように計画し実行し評価するかは学校に任されるようになりました。

また、ドイツの特徴であるデュアルシステムという教育システムは、ＢＢＳ２でも実施されています。職業教育を希望した生徒が１クラス 22 人から 25 人程度で構成され、企業で職業訓練するそうです。私も現在、本校でデュアルシステムのコースを取って、週に１日、企業で研修しており、非常に充実した実習をしています。将来、企業の最前線で働こうとする私にとって非常に有意義なシステムだと思います。日本でも、国としてデュアルシステムを推進していくためにも、企業に理解をしてもらい、産学官連携した取組が必要だと考えています。

ＢＢＳ２では私たちと同年代の生徒たちが、最先端のものづくりに取り組み、実際に形にしていました。グループでディスカッションを繰り返して、試行錯誤を重ねながら製品をつくり上げていく姿勢は私たちも見習わなければならないと思いました。

常に考える姿勢を大切にして、自ら課題を設定し、解決していく力を付けていくように日頃の生活を見直したいと思います。

報告者

岩城 諒汰郎
Ryoutarou IWAKI

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

BBS2での研修

Neue Schule研修

#09 Neue Schule Wolfsburgでの研修

私は以前からNeue Schule Wolfsburgに大きな関心や興味をもっていました。事前に調査研究をしましたが、実際に学校を訪問し多くの発見がありました。

まず、Neue Schule の校長先生から、学校生活、教育課程、学校行事などの概要を教えていただきました。

入学資格と入学方法については驚くことがたくさんありました。まず入学資格は、年齢のみで貧富の差や能力の差は関係ないということです。そのため、学校の中には様々な個性を持った生徒たちがいるようです。また、毎年、入学希望者が多く、倍率は 2.0 倍以上だそうです。入学の合否は、学力テストではなく「くじ」で決めることに少し驚きました。

校舎にも、非常に工夫が凝らしてありました。実習を行う部屋は床を木造にするなど、一見してどのような実習を行う部屋か分かるようになっていました。窓の配置にも工夫がしてあり、隣の部屋を見えるようにしておくことで、授業中に騒いだりすることを防いでいました。また、自然光をうまく取り入れたり、廊下をリラックスできるように木造にしてあったり、生徒の学習環境は非常によかったと感じました。

今回の Neue Schule Wolfsburg 訪問の主目的である授業参加は私たちにとって、非常に有意義なものでした。

午前は、数学と芸術の授業に参加しました。数学はグループディスカッションで問題を解答していく方式でした。解答を導いていくというプロセスを大切にしていると感じました。芸術の授業はギリシアについて話し合いながら進めていくものでした。このような授業は、必ず発言が必要になってきます。ドイツでは発言しない人を「壁の花」と言うそうです。我々も、「壁の花」にならないように、英語とドイツ語を使いながら必死に授業に参加しました。

午後は、工芸高校は部品の組み立て実習、工業高校は6歳の生徒たちにノギスの模型作成の指導をしました。部品の組み立て実習においては、決められた部品をどのように組み立てていくか、グループで話し合いながら進めていきました。ノギス制作実習は、ドイツ語でコミュニケーションをとりながら進め、6歳の生徒達も非常に喜んでくれました。

Neue Schule Wolfsburg では、多くの生徒と交流を深めることができました。日本でのドイツ語研修の成果で、ドイツ語で話しかけられても、少しは理解することができ、多くの生徒たちとコミュニケーションをとることが出来ました。ドイツの生徒たちはとても積極的で、コミュニケーションにおいても圧倒されました。私たちにとって、Neue Schule Wolfsburg での実習は、本当に有意義な体験となりました。

報告者

榊原　規一
Kiichi SAKAKIBARA

名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

#10 Auto Stadtでの研修

アウトシュタットはフォルクスワーゲン本社工場に隣接し、フォルクスワーゲン車の購入者や工場見学者に楽しんでもらうための「クルマのテーマパーク」です。2000年6月1日に開催されたドイツ万博にあわせて開業した施設です。また、ここは、フォルクスワーゲンディーラーでの購入者の受け渡し場所でもあります。ザ・リッツ・カールトンホテルなど宿泊施設も隣接した日本にはない、大規模なクルマのテーマパークです。

短時間の視察でしたが、パーク内を走り回り主要なパビリオンを全て見学しました。特に印象に残ったパビリオンを3つ紹介します。

■一台の車を最も美しく見せるパビリオン

ブガッティ・ヴェイロンは、最高速度 415km/h で走行ができる自動車です。ガラスを除きボディと細部に至るすべてのパーツがクロームメッキ塗装になっています。すべての展示品、床や壁はこの自動車を美しく見せるために設計されており、無駄なものを置かずこの一台を飾るためだけの施設になっています。

■野獣の檻のパビリオン

外観が真黒な四角い建物になっており、「檻」のような建築です。内部には「ランボルギーニ・アヴェンタドール」が展示されており、建物の外壁に張り付いた状態で展示されていました。

定刻にプロモーションビデオが流れ、サウンドと煙の演出があります。外側に張り付いていたランボルギーニが壁とともに回転しながらパビリオン内に現れ、煙とライトアップの演出とともに轟音を繰り広げるイベントがありました。この演出には、とても興奮しました。

■クルマの塔

ここは、納車をするための施設です。この施設は全面ガラス張りの 50mほどの塔になっており、内部には納車前のフォルクスワーゲン車が並んでいます。中心には、カーエレベーターといわれるクルマを運ぶためのエレベータがあります。オーナーが来館するとエレベーターで購入した自動車の側に行き、見学することができます。現在、2棟建っており、ユーザーが増えても対応できるよう、更に2棟建てられる敷地があり、最大4棟建築できるようになっています。

アウトシュタットは短い視察時間でしたが、それぞれの特色ある自動車の魅力だけでなく、ドイツの自動車産業の素晴らしさを感じました。フォルクスワーゲン社がその魅力を、世界の人々に伝えようとしている姿勢にも感心しました。世界に誇る自動車メーカーの実力を見ることができました。

報告者

古川　達也
Tatsuya FURUKAWA

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

#11 市役所訪問

ヴォルフスブルク市庁舎にモアース市長を表敬訪問しました。市庁舎の玄関には、この街の名称の由来でもあるオオカミの模様があしらわれたシンボルマークが掲げられていました。非常に重厚感がありとても趣があるものでした。

ヴォルフスブルク市のフォルクスワーゲン社で充実した実習を体験することができたのも、独日協会会長のバローグ＝クラウス輝子さんやモアース市長、ヴォルフスブルク市関係者のご協力があったからです。

モアース市長は私たちをヴォルフスブルク市庁舎内に招待してくださり、大変な歓迎を受けました。議場が懇談会の場所に設定されており、多くの関係者の参加のもと、非常に厳粛な雰囲気の中で懇談が進められました。私たち派遣団の全員が、非常に緊張していたことを覚えています。市長からは「名古屋との交流をもっと深めていきたい」と、大変うれしいお言葉をいただきました。また、バローグさんからは、今回の海外派遣のいきさつや私たち派遣団の思いをお話しいただき、参加者に大きな感銘を与えました。

最後に、市庁舎のゲストブックに派遣団一人ひとり署名をさせていただき、私たちの訪問をしっかりとヴォルフスブルク市に刻むことができました。

さらに普段入ることができない市庁舎の屋上へとお招きいただき、ヴォルフスブルク市の街並みを一望することができました。屋上からの景色はとても壮観で、高層建築物が少なく、屋根や壁の色が統一された伝統的な煉瓦造りの住宅群が建ち並んでいる風景が眼下に広がっていました。その中で、ひと際存在感を放っている建築物が、４本の煙突がシンボルであるフォルクスワーゲン本社工場でした。街のシンボルであり、ヴォルフスブルク市民の誇りであると感じました。これから私たちが、実習をする場所だと考えるとワクワクしてきました。

ヴォルフスブルク市は豊橋市と友好都市提携を結んでいます。市長は、今後、名古屋とも関係を深めていきたいという気持ちをもっておられました。今回の私たちの訪問が、お互いの国の技術発展や日独の絆を深める良い契機になると確信しています。

報告者

寺島　敬吾
Keigo TERASHIMA

名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

市役所訪問

#12 ユースホステルでの生活

ユースホステルとは、ドイツ、プロイセンのシルマンが創設した、青少年少女の旅に安全かつ安価な宿泊施設を提供しようという主旨ではじまった宿泊施設の世界的なシステムです。

世界 80 カ国に約 5,500 施設（2005 年時点）があり、約３分の２がヨーロッパにあるそうです。自然とのふれあい、国籍、人種、宗教などを越え、様々な国の相互交流ができる機会を提供しています。

日本のユースホステルでは、利用者が守らなければならない「４つの誓い」が、ＪＹＨ(日本ユースホステル協会）によって以下のように定められています。

①私たちは、簡素な旅行により、未知の世界を訪ね見聞を広めよう。
②私たちは、規律を守り、良い習慣を身につけよう。
③私たちは、共に助け合い、祖国の繁栄に努めよう。
④私たちは、国際人としての教養を高め、明るい社会を建設しよう。

私たちが宿泊したヴォルクスブルク・ユースホステルは、二段ベッドが両側にあり、シャワーやトイレ、洗面台も各部屋に設置されているので不便なく過ごすことができました。このような充実した設備で安価に宿泊でき、様々な国の人たちとコミュニケーションをとることができるので、海外派遣の時に利用するには非常にいい施設だと思いました。外庭では、ビーチバレーやサッカーもでき、私たちもドイツの学生とサッカーを楽しむことができました。

私は、今まで、日本のユースホステルに宿泊する機会がなかったので、ぜひ宿泊し、ドイツと比較してみるのも面白いと思いました。ユースホステルという宿泊施設を知らない人たちに、施設のよさを伝えていこうと考えています。

ドイツ派遣では、いろいろなホテルに宿泊しましたが、ユースホステルは全て自分でやらなければならないので、人として大きく成長できる場であり、普段、親にやってもらっていることのありがたさを実感することができる場所であるので、本当に良い経験になりました。

報告者

服部　翔真
Syouma HATTORI

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

#13 ドイツの家庭に入って

私たち派遣団は、ドイツ滞在最終日にドイツの家庭に訪問しました。私が訪問した家はレンガの造りで、おとぎ話に出てくるような可愛い家でした。日本では高層のコンクリート構造のマンション等が多いけれど、私が訪問した家庭の付近は、一軒家がほとんどで低い建物ばかりでした。そのため、非常に見晴らしがよく、電線も地中に埋設されているので、すっきりとした景色でした。

ドイツと日本の家庭で違っていたことは、まず家への入り方です。日本では、玄関で靴を脱いで入るのに対して、ドイツの家庭では、玄関にマットが敷いてあり、そこで靴の汚れを払ってから靴のまま家の中へ入ります。靴をずっと履いていることに私は違和感がありましたが、ドイツでは当たり前のことでした。

家の中には、ドイツの気候に合わせて、冬の寒さをしのぐための暖炉があり、逆に暑さをしのぐためのクーラーや扇風機はありませんでした。ドイツは夏でも乾燥しやすく日本のような蒸し暑さはなく、非常に過ごしやすかったです。

訪問先の女の子の部屋は、壁がピンク色や紫色に塗られていて女の子らしい可愛い部屋でした。部屋には、日本の漫画がたくさん置いてありました。話をすると、日本のアニメ文化が好きだと言っていました。女の子に日本のアニメのコスプレをした写真を見せてもらいました。遠く離れたドイツでも日本の文化が知られていて、あらためて日本の文化の素晴らしさを感じました。

夕食は、パンといろいろな種類のハムとチーズを御馳走になりました。日本のものよりチーズなどがとてもおいしかったです。ドイツ語や英語で話しかけましたが、言葉がうまく通じず、コミュニケーションをとるのに苦労しましたが、とてもいい思い出になりました。

私が訪問した家庭以外の訪問先では、史跡めぐり、お菓子作り、ビリヤードなどその家庭で趣向を凝らしたおもてなしをしていただいたようです。それぞれの家庭で様々な体験をさせてもらうことができ、現地の方々の暖かさを感じました。

英語やドイツ語がもっとしっかりと話せたら会話が弾み、いろいろなことを聞き、知ることができたと後悔しました。今後、私たち技術者は海外で仕事をしたり、国内でも海外の人達と仕事をする機会が確実に増えてきます。外国語の習得が非常に重要になってくるので、これからは今まで以上に外国語の勉強を頑張ります。

今回、ドイツの家庭に入って、日本では味わえないとてもよい経験ができました。この経験を、将来にいかすとともに、積極的に社会に還元していきます。

報告者

服部　真季
Maki HATTORI

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

#14 高速鉄道 ICE277を利用して

ICE とは、ドイツを中心に運行されている、ドイツの新幹線です。ヨーロッパの鉄道の中でも高い性能を持っており、フランスやベルギー、オーストリアなど、周辺の国々にも、路線を拡大しています。白いボディに赤いラインで装飾されています。特徴として、ヨーロッパでは珍しく座席指定券なしでも乗車可能で、食堂列車が一両ついており、ほかにも、トイレや一部の車両には、個人用テレビがついており、居住性がとても良い高速鉄道です。今年の6月で運行開始25周年を迎えました。

私たちは、ドイツ派遣最終日にヴォルフスブルク市からフランクフルト市に移動する際に利用しました。事前研修の調査では、ドイツの鉄道は時間どおりに電車が到着することが少なく、しかも、到着するホームが突然変更になることがあると聞いていました。幸いにも定刻どおりに到着し、乗り込むことができ内心「ホッ」としました。

車内は綺麗で、騒音処理もしっかりとなされており、非常に静かでした。椅子は紺色ベースで新幹線よりも横、縦ともに大きく、肘掛が両側にあります。椅子の後ろにはテーブルと網がついており、網には雑誌類が入っていました。窓も、新幹線より大きく、景色がはっきりと見えました。トイレは1両に2部屋ほどついており、無料で使うことができます。トイレの中は、日本より広くて、設備も揃っていたので快適でした。

ヴォルフスブルク駅を出たICEはブラウンシュバイク駅、カッセル駅を過って、フランクフルト駅へ向かいます。緑の山や草原の中に赤色のレンガで建てられた家々と古い教会等、道中の窓から見える景色は素晴らしいものでした。まるで、自分が映画やアニメの世界の俳優になった気分になるような風景でした。

私は事前にドイツの鉄道を調査した時は、日本の鉄道の方がシステム、車両性能、快適性も優れていると感じました。しかし、実際に乗車してみると、車内も日本の新幹線に匹敵するほどの設備で快適でした。海外での移動手段は、その国をよく知るうえで、鉄道を利用することが最適だと感じました。今後、海外に行く機会があれば、必ず鉄道を利用しながら移動しようと思いました。

報告者

山田　智大
Tomohiro YAMADA

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

＃15 ドイツの産業について

報告者

安藤　翔太
Syouta ANDOU
名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

私たちドイツ海外派遣団はコマツ・ハノマーグ社やフォルクスワーゲン社などの企業研修を通じてドイツの産業について様々なことを学びました。

■Industrie4.0　IoT　Smart Factory について

Industrie4.0 は、ドイツ政府が製造業のイノベーション政策として主導しているプロジェクトです。そのコンセプトとして、IoT（Internet of Things）、Smart Factory（考える工場）があげられています。

IoT は、あらゆるモノをインターネットで接続してネット上で管理しよう、というものです。すべてのモノの現状をリアルタイムで把握し管理や分析をできるようにし、製造工程の最適化が進み、より効率の良いものづくりができるようになります。

Smart Factory は、人工知能が生産工程の最適化を行い、自ら考える工場を構築していくものです。人工知能は最も早く、最低限のコストでの生産工程を計算し、生産工場に指示を出すことで最も効率の良い自己生産が可能になります。

■ドイツの産業とイノベーション

ドイツの産業は新たな開発のために多額の予算を投入しています。ドイツ国民の７人に１人が直接的あるいは間接的に基幹産業である自動車産業に従事しています。環境技術では温室効果ガス排出削減、リサイクル、などの分野は特に優れており世界をリードしています。

交流した訓練生たちが、ドイツの産業を支え、国が進めているプロジェクトの中で様々なイノベーションを起こしていることに、我々も負けずに技術・技能を磨こうと考えました。

■ドイツ企業が求めている人材

ドイツ企業が求めている人材は、向上心があり、自ら考え常に挑戦し続ける人だそうです。コマツ・ハノマーグでは、デュアルシステムを実践しており、訓練生たちの貪欲に何でも学ぼうとする姿に圧倒されました、私たちにとってよい刺激になりました。

また、フォルクスワーゲンの職業訓練学校では、訓練生がグループセッションし、自ら考えたことを、直ぐに製造に結び付けていく実習スタイルでした。
常に必要なものは自分たちで調達し、自ら考え失敗を繰り返しながら、技術・技能の向上を図っていました。教員は、詳細な指導は一切しないそうです。

両企業の訓練生たちは、強い向上心を持ち、様々なことに挑戦していくことを心がけていました。我々もドイツでの経験を生かし、日本の産業の発展のために、常に新しいことに挑戦し続けていきます。

#16 ドイツのデザイン事情

報告者

増田　涼風
Ryouka MASUDA
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

ドイツに到着して、まず、目に入ったものは、異国のサインやマークでした。ドイツの非常口のマーク、マクドナルドのマーク、公共施設のAEDのマーク等、日本と違っているものが多くあり、そのデザインや色に非常に興味を持ちました。

ベルリンの歩行者用信号には「アンペルマン」と呼ばれるキャラクターが使われています。このピクトグラムは、光る面積も大きく、歩行者も見やすいデザインとなっています。進行と停止の表示を青と赤の色彩による識別だけでなく、表情や身振り手振りによる誰にでも理解しやすく、子供からお年寄りや旅行者を含む歩行者の安全を守るためにふさわしいデザインであり、ユニバーサルデザインであるといえます。

ドイツの建築デザインは、古い建物（木組みの家）と新しい建物（ガラス張りの建物）が同じ空間に存在しているにも関わらず、違和感なく調和がとれていて街全体がアートであるかのように感じました。建物はアイボリーやベージュ、グレーがかったパステルカラー、レンガの赤色等、暖色系等の色使いの建物が多く華やかで温かいイメージでした。教会は外観的装飾が多く、屋根の部分は細長い円錐のような尖った形をしており、華やかな街の中でも存在感を放っていてとても美しいものでした。

プロダクトデザインでは、ペットボトルのキャップの形と色が気になりました。形は日本のペットボトルのキャップと比べると、浅くて角が丸みを帯びていました。色は日本のペットボトルのキャップは白色（お茶のキャップは黄緑色）が多いのに対し、ドイツのペットボトルのキャップは青色や緑色、赤色等、様々な色が使われていて、店頭に並ぶととてもカラフルに思えました

バウハウス資料館で見た鋼管の片持ち構造の椅子は大量生産に優れていて、必要以上な装飾がされていないので古びることなく、今でも見かけるような椅子のデザインになっていました。バウハウスのデザイン思想は機能にデザインを合わせる考え方なので、シンプルで機能性に優れたものが多くみられました。

ドイツのデザインは日本のものに比べると色遣いがカラフルで、建物には様々な装飾が加えられている印象を受けました。街で見かけるサイン、マークなどは言葉のわからない私たちでも直感的に何を示しているものなのかがわかるデザインとなっていました。日本であってもドイツであっても誰もが直感的にそれが何かを理解できるデザイン、使いやすいと思えるようなデザインが必要とされていることをあらためて異国の地で知ることができました。

＃17 ドイツの教育事情について

報告者

亀山　倫太郎
Rintarou KAMEYAMA
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

ドイツはものづくり大国であり、デュアルシステムという時代の一歩先を行く教育システムを取り入れている国です。ドイツのデュアルシステムは、小学生の段階で将来を考え、進路を決めることで、専門分野の可能性を最大限に高めることができると、自分の目で見て感じました。

訪問した学校の授業の内容は、大半がグループで行うものでした。今回参加した数学の授業や工業科の授業も、グループで行う学習でした。こういった授業形態からも、将来働く上で必要となる協調性が身に付くことをあらためて実感することができました。

職業訓練生の実習風景を見て第一に思ったことは、「自分もここで学びたい！」という気持ちでした。ドイツはデュアルシステムを取り入れていることで、日本では就職後でしか実現できない企業の下での学習を、高校生の段階から体験することができ、とても羨ましく思いました。

また、学習システムも素晴らしいものでした。例えば私たちの実習では、クラス全員の内容が決められており、早く作業を終えても、最後の人が終わるまで待たなければなりません。しかし、ドイツでは課題が個人で決められていて、自分の課題を終えると次のステップへ、また終わると次のステップへと自分のペースで進むことができるので、常に自分のスキルを磨くことができ、とても良いシステムだと思いました。

日本ではよく企業での残業が問題に上がりますが、ドイツという国には残業はありません。仕事が終わるとすぐに帰宅し、自分の趣味や家族と過ごし、自分の時間を大切にします。何故こんなにも働いている時間に差ができているのに、国としての技術力に差ができないのでしょうか。私は、教育システムの違いではないかと考えました。

ドイツではデュアルシステムという教育システムがあります。これは、常にものづくりの現場で実際に使うことのできる知識を学び続けることのできる仕組みです。もちろん使うことのできる知識なので勉強している学生はみな、生き生きとした感情が表情にあふれていて、楽しそうに作業をしていました。

日本の現状と比べると、ものづくり教育において、少し差があるように感じます。これから大きく変化していく社会で生き残っていくためには、自ら課題を考え、そして解決していく人材が必要ではないでしょうか。ドイツの教育システムには、そういった人材を育てていくノウハウがあると思いました。日本の教育制度にも素晴らしいところがありますが、海外の素晴らしいところは積極的に取り入れていく必要性を、この海外派遣を通して感じました。

#18 ドイツの環境について

報告者

赤木　友李夏
Yurika AKAGI
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere Höhere Schule

■環境大国ドイツの取組

ドイツではエネルギーシフトにとても力を入れていると感じました。例えば、ドイツでは「脱原発」を謳っており、今後全ての原子力発電所を廃止する予定です。しかし、隣国のフランスが原子力中心で、お互いの国境近くに原子力発電所があるため、問題視されているようです。また、街を離れて畑がたくさんあるところでは、何十本もの風力発電がありました。まるで風力発電の畑のようでした。他にも、「Pfand」と呼ばれるシステムがあります。それは購入時に飲み物代とボトル代を支払い、専用の機械にボトルを返却すればボトル代が返ってくるという住民が簡単に環境に貢献できるシステムです。駅や空港にたくさん設置されており、とても画期的だと思いました。

■国民の環境に対する意識

環境大国というだけあって国民の意識が高いと思っていましたが、ポイ捨てが多く道路にたばこや紙くずがたくさんありました。しかし、節水の意識は高く、公共のトイレが有料でした。また、買い物レジ袋も日本と同様に有料（安いもので60円、大きな袋は200円ほど。少し高いかな？）でした。学校では原子力発電の問題についてしっかり学んでいるようで、生徒たちから「福島原子力発電所の件についてどう思うか」と質問されるぐらい意識が高かったです。国全体の環境問題には意識が高いものの、身近な環境に対する意識は少し低いと感じました。他にも、森の面積が日本とほぼ一緒らしく、日本では山の方に行けば緑が沢山ありますが、ドイツでは街中にも緑が目に付きました。

■エネルギー問題を中心としたドイツの環境対策について

ドイツはなぜ環境大国と呼ばれているのでしょうか。それは、ドイツが世界で初めて自然を保護する法律といわれる「環境法」を制定したからです。国全体で環境を良くしようと取り組んでいます。それだけでなく、「エネルギーシフト」に力を入れていて、2025年までに電力供給の40%～45%を再生可能エネルギーでまかなえるようにするそうです。

全体を通して、国や企業は環境についてとても力を入れていると感じました。しかし、一人一人の身近な環境については、まだ意識が低いように感じました。
しかし、これは私たち日本にもいえることだと思います。身近にある道路や公園の環境も良くしていかないといけないと思います。私たちもそういった小さなところから環境問題を考えていき、やがて国全体の環境が良くなるようにしていきたいです。

#19 ドイツの衣食住

報告者

伊藤　遼
Ryou ITO
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste Ältere höhere Schule

■ドイツの衣

日本とドイツでは、特別な違いはないように感じました。ファッションが若者同士の共通の話題になったりするのは、日本とドイツで変わりはないです。ただし、フォーマルとカジュアルの区別はドイツのほうがしっかりしているように感じました。きっちりとした性格のドイツ人らしさがそこからうかがえます。

■ドイツの食

食事のとらえ方は大きく違うと感じました。日本では、おいしいものや流行のものを食べることが重要だと考えます。しかし、ドイツでは、食事に重きを置いていないようです。家族や友人など食事をする相手を重視しています。終業後は、家族と夕食をとることがドイツでは一般的だそうです。

■ドイツの住

ドイツでは住が最も重視されているようです。街並みの統一は住に対するこだわりの表れではないでしょうか。外観デザインのこだわりは、日本とは比較になりません。しかし、日本では、別の視点で住にこだわっています。住環境の充実と安全性こそが日本の誇るべき点です。地震大国である日本において安全な建物というものが常に求められています。また、夏は高温多湿で冬は氷点下にまで達する日本では、空調設備と断熱性能が発展してきました。ドイツでは冬場は極端に日照時間が短く、寒さが大変厳しいそうです。実際、ドイツの住宅を見ると、壁厚が日本の２倍ほどあり、窓には複層サッシが使われていました。冬を意識した意匠だと感じました。

■衣食住と環境

ドイツといえば、緑を愛する環境大国です。彼らの暮らしは、環境を意識したものだといえます。たとえば、ドイツの住宅には基本的にエアコンがありません。もともと涼しく過ごしやすい気候ですが、近年の地球温暖化の影響で30度を超える日も珍しくなくなりました。また、街には緑があふれています。ベルリンなどの大都市にも緑地があり、そういった場所を散歩することがドイツでは日課のようです。

■仕事とライフスタイル

ドイツでは、残業がありません。仕事を定時に終えると、あとはプライベートの時間といった印象を受けました。また、休暇は３～４週間とることが一般的で、仕事が残っていても必ず休暇を取るそうです。さらに、休暇中は仕事の電話に出ることもしません。仕事とプラベートの区別は徹底されているのです。

■まとめ

国によって衣食住の中で重視するものが違います。ドイツでは、圧倒的に住を重視しています。勤勉に働くドイツ人にとって、住宅は大切な家族と過ごす安らぎの場なのだと感じました。日本とは違った暮らしは、興味深く、新鮮なものでした。この経験を私たちの将来の仕事にもいかしていこうと考えています。

#20 ドイツの建築事情

報告者

榊原　匡泰
Masayasu SAKAKIBARA
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste ältere höhere Schule

ドイツの建築は地方によって雰囲気が随分違います。ベルリンやフランクフルトなどの街は、歴史ある建築が多く存在しますが、奇抜なデザインが特徴である近代建築も楽しむことができます。

■建築物の特徴

ドイツの法律で、建物の階数や屋根の勾配などが具体的に定められています。したがって、屋根や外壁の色が統一されドイツ特有の景観が住民一人ひとりの協力によって守られています。

住宅建築については、左右対称、規則的な窓の配置、屋根の種類に日本との違いを感じました。特に、日本では一般的に寄棟屋根や切妻屋根が一般的ですが、ドイツでは、半切妻屋根やマンサード屋根をよく見かけました。また、ヨーロッパ特有の赤瓦屋根が立ち並ぶ光景はとても美しく圧巻でした。

公共建築物は、既存の古い建物を再利用していることに驚きました。また、いくつかの都市で鉄道の駅を見る機会がありましたが、どれも全面ガラス張りでとても美しい反面、恐怖も感じました。

■環境による特徴

日本で建物を設計するときに一番気を使うのは耐震構造です。しかし、ドイツでは地震がほとんどないので、耐震構造という概念があまりないように感じました。また、日本では、南面に居室を置くことを重要視しますが、ドイツではあまり重要ではないようです。

■木組みの家

ドイツでは、木造の住宅が目に留まります。木造の住宅は、木材で骨組みを作り、壁を漆喰、レンガ、石などで作る（ハーフティンバー）構造によってできています。また、地方によって材料や色が異なり、同じ木造の住宅でも様々な特徴があります。

■バウハウスと建築

バウハウスでのデザインの考え方は、機能やコンセプトを追求してからデザインを合わせていきます。よって、機能やコンセプトだけを表現したシンプルなデザインになり、後世までデザインが朽ちることはありません。また、非対称なデザインが良いとされています。バウハウス資料館では、デッサウ校舎の模型を見学できました。それは、長方形のシンプルな校舎が別々の方向に非対称に配置されており、バウハウスの理念を知ることもできました。

■ドイツ人の建築思想

ドイツ人がとても大事にしている身体的な価値観は「居心地の良さ」です。温湿度、気流、音響、空気質など目に見えない環境から、家具や小物類の目利きまで心から気持ちが落ち着き、くつろげるような生活空間を求めています。町の広場や多く設置されていたベンチ等は、ドイツ人がくつろげる空間のひとつだと感じました。

＃21 ドイツの街

ベルリン・ハノーファー ヴォルクスブルク視察を通して

報告者

藤井　春香
Haruka FUJII
名古屋市立工芸高等学校
Industriekünste ältere höhere Schule

私たちが視察した３つの都市（ベルリン、ハノーファー、ヴォルフスブルク）は素晴らしく、記憶に残る都市でした。ベルリンは、ドイツの首都であり、市域人口が３５０万人というドイツで最大の都市です。ドイツの歴史に触れることのできる現存する歴史的建造物の一部が残されている街でもあります。その他にも、パンクなアートの街としても有名です。実際にベルリンの街を歩いていると建物や壁にスプレーで描いた落書きを多く見かけました。この落書きは、グラフィティというアートの表現法の一種で、反骨精神を持つアーティストが多く住むベルリンならではの光景です。

ハノーファーは、「森の中に街がある」といわれるほど緑が豊かな街です。市の面積のおよそ５０％が緑地となっており、環境政策に力をいれた都市計画を行っている都市で、「庭園の様な街」をモットーにしています。そして、ハノーファーはどちらかというと観光地ではなく、商業都市です。コマツ・ハノマーグ社などがあり、世界最大級の見本市会場もあります。２０００年には、世界万国博覧会が開かれました。

ヴォルフスブルクは、２０世紀に建設された、数少ない都市のひとつで、フォルクスワーゲンを生産するために建設された計画都市です。人口およそ１２万人に対して、およそ７万人がフォルクスワーゲンで働いているというフォルクスワーゲンの企業城下町です。かつては自動車産業だけの街で観光地はありませんでしたが、２０００年に自動車のテーマパーク「アウトシュタット」などができ、現在では多くの観光客が訪れる街になりました。

訪問した３つの都市に共通するドイツの街の特徴もいろいろありました。ドイツの家の屋根は、日本では少ない三角屋根の家がほとんどで、信号機も日本では横向きだが、ドイツでは縦向きでした。ドイツは日本よりも気温が低く冬には雪がたくさん降るので、雪が積りにくくするための工夫であると思いました。また、ドイツの信号機で驚いたことは、歩道の信号機の青から赤に変わるまでがとても短い信号機が多かったことです。これもドイツの交通事情と関係があり、ドイツの街の特徴だと思いました。そしてなんといっても、やはりドイツの街はきれいということです。おとぎ話に出てくるような芸術的な世界が広がっており、日本の建造物のデザインとは全く違うので、日本で暮らしている私の目には新鮮に映りました。そして私は、ドイツの家はレンガの住宅ばかりだと思っていましたが、木造の住宅を多く見かけました。

夢中になったこと。
変化したこと。
伝えたいこと。

「研修を終えて」

出国から帰国までの記録

広がる世界　広がる未来

藤井 春香　名古屋市立工芸高等学校 都市システム科２年

ドイツ海外研修を終えて、企業実習、現地高校生との交流などを通して、一回りも二回りも大きくなれ、人間的にも成長したと思います。

フランクフルトでは、日本とドイツの街なみの違いに感動しました。一つひとつの建造物を見ても、日本にはない良さを感じることが出来ました。

ベルリンでは、技術博物館で車、船、鉄道などの乗り物のほかに様々な工業製品の歴史について触れることが出来ました。しかし、ベルリンで一番心に残った場所は、「ベルリンの壁」「ザクセンハウゼン強制収容所」です。私は歴史が好きで、以前、書籍で見たことがあったのですが、やはり実際に見るのは全然違いました。

ハノーファー、ヴォルフスブルクでは、工業を学ぶ生徒たちとの交流があり、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。ドイツ語と英語と身振り手振りで会話することが出来ました。しかし、ここで改めて言語の大切さ、世界共通語である英語の大切さを実感しました。海外で活躍していくためには、英語などの言語能力が必要だと実感しました。

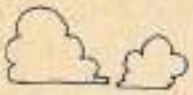
ヴォルフスブルクでの職業訓練生との交流では、溶接などの危険な作業も同年代の女性が行っており、「怖くないの？」と聞くと「最初だけだよ。なれたら大丈夫だよ。」と言っていて、ドイツの女性は強いなと思いました。

訓練生の中には、女性がたくさんいました。日本もドイツみたいに工業でも女性が活躍できる場を広げていきたいと思いました。他にも、訓練生たちは自己主張がしっかりとできるなど、見習いたい点がたくさんありました。

この海外研修では、たくさんのことを吸収することが出来ました。この経験を自分の周りからでも少しずつ広めていきます。そして、将来に繋げていけるようにこれからも工業の学習にしっかりと取り組みます。

縁結びで有名な橋に
たくさんついていた南京錠

フランクフルトの有名な塔



初日Dinner

1日目
終了

ドイツ国内でよくみかけた
薬局のマーク

フライトの
疲れもあってか
熟睡できた！

フランクフルトの
街を視察

ドイツ独特の建物

街にある人形
かわいい♪

ドキドキした1日目
無事に終了！

Entscheidende Wende ～転機～

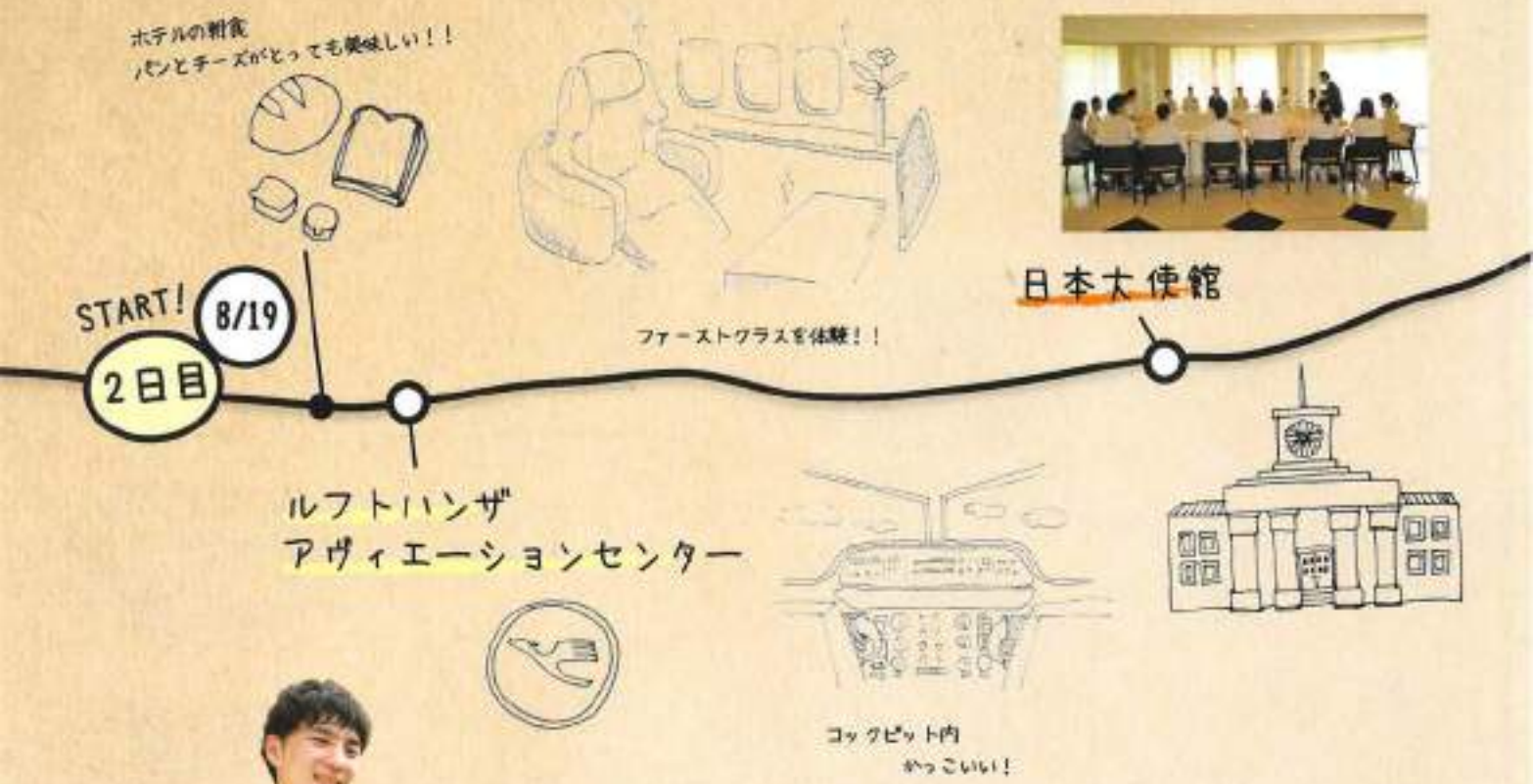
榊原 規一　名古屋市立工芸高等学校　電子機械科２年

私はこの研修で多くのことを学びました。それは、言葉の壁があっても、自分の考えを伝えようとする気持ちがあれば、十分コミュニケーションが取れること。また、「どれだけ他の人と違ったことができるかどうか」を常に意識していかなくてはならないこと。これはコマツ・ハノマーグ社の伴副社長からいただいた言葉です。グローバル社会の変化に主体的に対応できる専門的技術を持った人材を育成していくためには、大変必要なことだと感じました。

この海外派遣は、日本を代表してドイツに派遣されているものだと、いつも自分に言い聞かせていました。派遣中はいつも緊張した空気があり、海外での集団行動の大変さを思い知らされました。企業では専門用語が飛び交っており、理解できないこともあり、さらに専門知識を習得する必要性を感じました。

VolksWagen の本社工場視察や訓練生との実習を通じた交流は非常に充実したものでした。私たちと同年代の訓練生が、最新の機器を駆使して、非常に精度の高い製品を製作している光景には感動しました。

私はこの派遣により、「海外で働きたい」「世界中の人とコミュニケーションを取りたい」という欲が大きくなりました。私の夢や将来を考える大きな機会となりました。研修中には貪欲にドイツの技術や文化、歴史など細かなところまで吸収できました。今回のドイツ派遣を成功させてくださった方たちには本当に感謝申し上げます。



「Aus der neuen Welt」

伊藤　遼　名古屋市立工芸高等学校　建築システム科３年

この研修に参加できたことは、私の人生に変化を与えるような素晴らしい体験になりました。NADIOS の一員としてドイツへ行けたことに感謝し、名古屋の代表としての自覚と責任をもって、今後に生かしていきます。

事前研修では、２０人の新しい仲間とドイツについて調査研究したことをお互いに発表し、ドイツに関する知識を徐々に広げていきました。メンバーは工業科でそれぞれの専門を学ぶ将来のスペシャリストたちです。自分の専門外の話を聞くのは新鮮で、研修に行くのが非常に楽しみでした。

現地視察では、フランクフルトの旧市街や高層ビルに胸が高鳴りました。ベルリンでは、様々な名所や施設を視察しました。その中でも、ドイツ技術博物館の展示は圧巻でした。古いものから新しいものまで、様々な時代に活躍した技術を目の当たりにして、現代の技術のルーツを知りました。

コマツハノマーグ社、フォルクスワーゲン社の実地研修では、ドイツの技術力の高さを肌で感じました。また、同年代の訓練生との交流は、とてもいい刺激になりました。日本以上に向上心があり、現場での実習を大いに楽しんでいるように感じました。自分たちの学習に対する姿勢というものを今一度、考え直すいい機会となりました。ものづくりを純粋に楽しんでいるドイツの研修生たちが製作する製品の完成度は高く、負けてられないと強く思いました。

この海外派遣では、世界を肌で感じ、私自身の視野が広がりました。この研修では、たくさんの人に出会い、刺激的な毎日を過ごすことができました。そして、ドイツという国をより深く知ることで大好きになりました。世界はまだまだ広いと素直に感じました。

私は、この派遣を実現に導いた方々、ドイツで私たちを温かく迎えてくれた研修生や企業の方々、そして、NADIOS のメンバーたちに本当に感謝しています。

大使館で食べたケーキ

ベルリンのシンボル

ドイツ国内のいたるところで
みかけたオブジェ

国内線で
ベルリンへ

日本大使の八本さん
あったかくて優しい雰囲気

2日目
終了

研修を終えて 4 榊原 匡泰

独学旅行記～建築編～

榊原 匡泰　名古屋市立工芸高等学校 建築システム科３年

ドイツの海外派遣では、工芸高校で建築を学ぶ者として、三つのことを学びました。

一つ目は、「歴史的建造物と近代的建築物によって見聞を広げたこと」

ドイツでは、新しい建築物よりも歴史ある建築物のほうが高く評価されていると感じました。初めて見るゴシック様式の教会では、高いドーム型の天井などが綺麗でした。私は、宗教建築に興味があって、将来は宗教と住居が融合した建築を考えていたので、大変参考になりました。特に、ヨーロッパの木造真壁建築の技法であるハーフティンバー構造の建築物は、統一感のある外壁や屋根が素晴らしく感動しました。

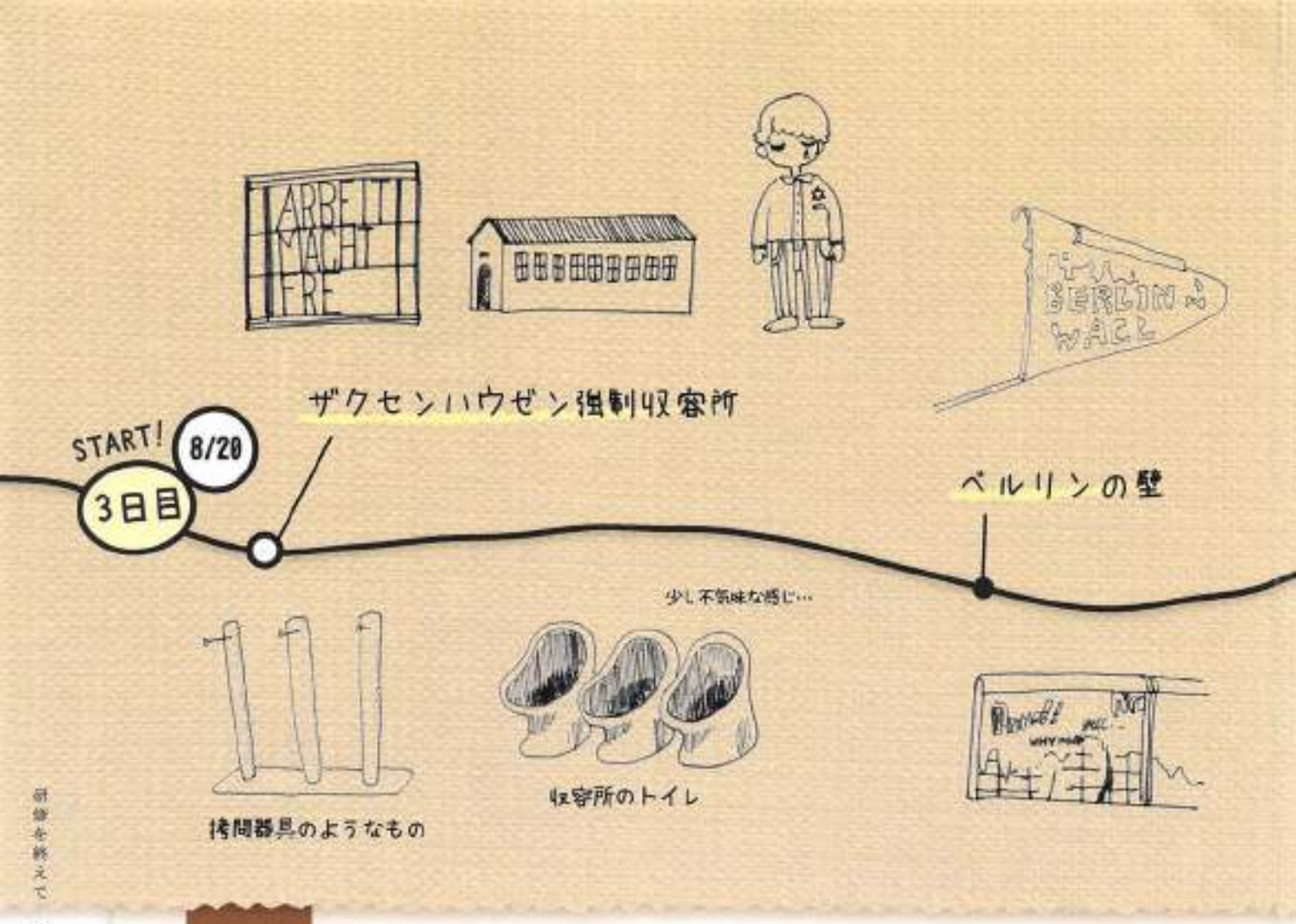
二つ目は、「環境によって建築が変わること」

地震が多い日本と、少ないドイツでは耐震基準が違います。また、大半の建築物にエアコンの設置がないことも興味をひきました。両国の法律の違いによる建築物の違いには驚かされることが多かったです。

三つ目は、「バウハウスのデザイン」

バウハウスでは、デザインの考え方について学ぶことができました。機能やコンセプトを重視したシンプルなデザインには共感できました。また、建築家として成功するためには、自分の建築に対する信念を固める必要があると気づきました。

ドイツで学んだことは建築以外にもたくさんあります。今後の人生で、学んだことを周りの人に伝え、社会に出てからも還元する機会が必ずくると思うので、頑張りたいと考えています。



見て、感じて、学んだ

増田 涼風　名古屋市立工芸高等学校 デザイン科3年

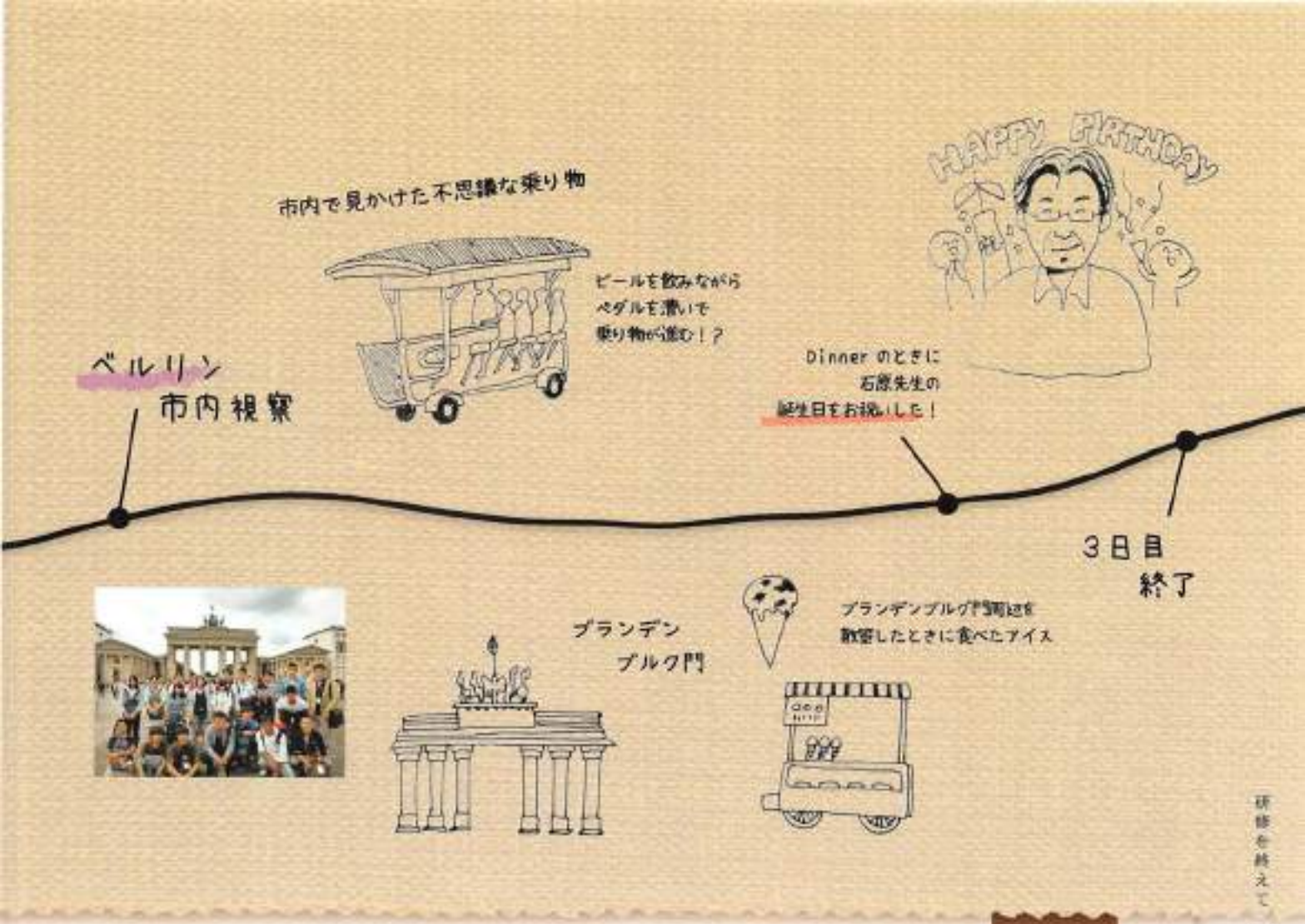
私がドイツを訪問し最初に思ったことは、街並みがとても美しいということです。初日に視察したフランクフルト市内には、伝統的な木組みの家と、新しいガラス張りの建物、赤砂岩でできた協会など様々な素材や形の建物が建立しているのにも関わらず、調和がとれていることに驚かされました。

ザクセンハウゼン強制収容所では、現地でしか見ることができない写真や建造物を見ることができました。ベルリンの壁の厚みや規模についても、現地に行かなければ知ることもできませんでした。

バウハウス資料館では、授業で習ったバウハウスについてより深く知ることができました。バウハウスのデザイン理念も座学で習うより、本物の作品を見ることで理解が深まりました。

Neue Schule Wolfsburg での体験授業では、私たちと同年代の生徒と一緒に授業を受けました。英語とドイツ語で一生懸命にコミュニケーションをとりました。とても魅力的な学校で、もし自分がドイツに住んでいたら通ってみたかったと思いました。
フォルクスワーゲン社の研修では、同年代の訓練生が既に社会で働けるスキルを身につけていることに感心しました。日本でもデュアルシステムによるものづくり教育が進められるといいと感じました。

ドイツでの様々な研修では新たな発見がたくさんありましたが、食文化や街並み、言語や使っている道具等、何気ない日常生活の違いがとても新鮮でした。今まで知らなかったことに触れることができた喜びと、これからも知らないことをどんどん吸収していって自分の力にし、将来に役立てたいという思いがこみ上げました。



ひどびと、people、Menschen。

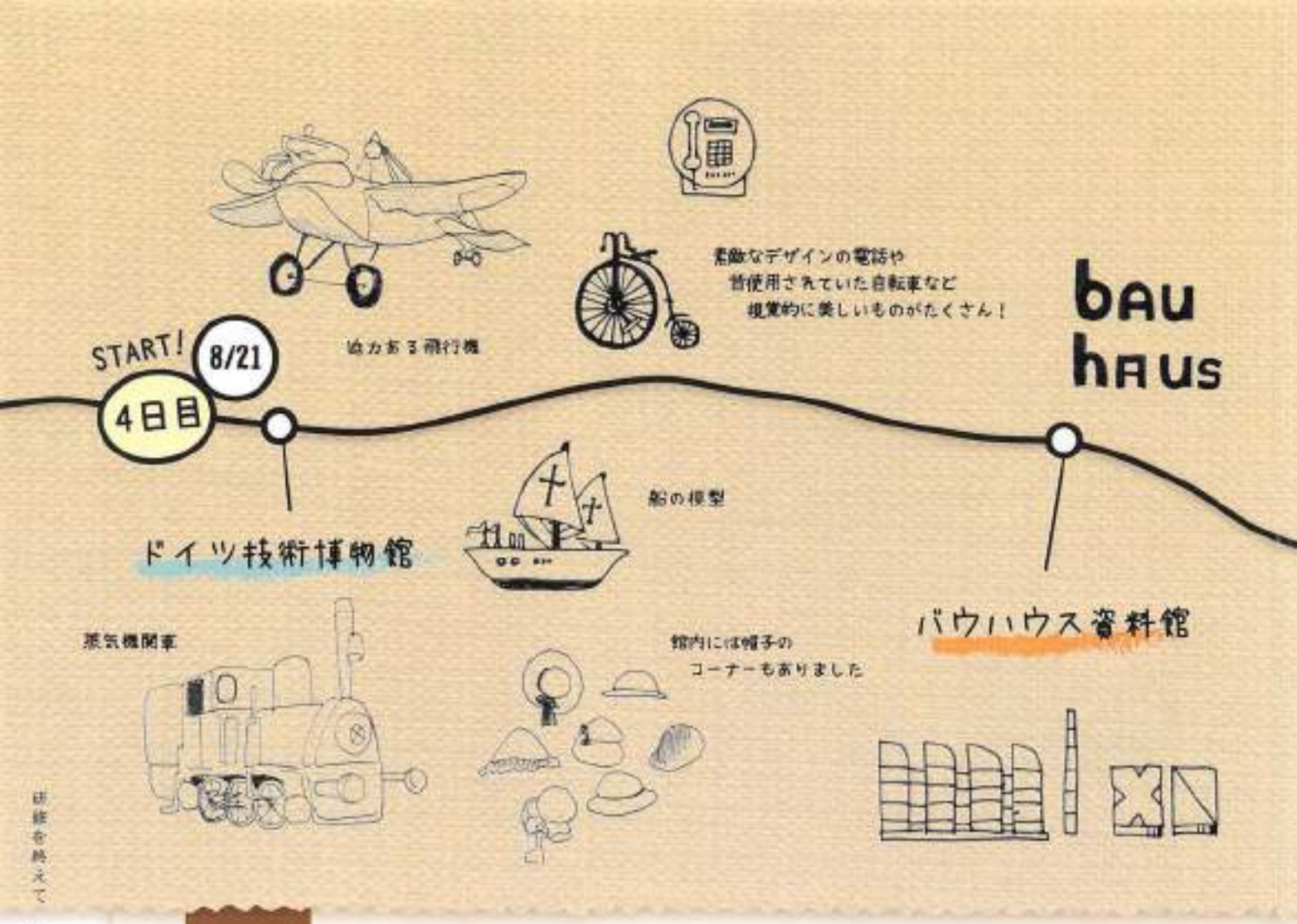
牧 弥生　名古屋市立工芸高等学校 グラフィックアーツ科３年

ドイツの各街の雰囲気や歴史に触れ、企業研修や現地校での研修を通して、人々と交流し異文化を体験することにより見聞を広めることができました。

日本大使館の八木大使との懇談会では、私たちの質問に丁寧に答えて下さいました。ドイツと日本の懸け橋として経済や国際的な交流に携わるだけでなく、人間としても素晴らしい方でした。また、コマツハノマーグ社の伴副社長との懇談では、私たち学生に対して求めるもの、社会に出てからのアドバイスなど、非常に興味深いお話をしてくださいました。特にマーケティングに関するお話は心に残りました。伴副社長は、「知見を深める事が大切だ」と何度もおっしゃっていました。私にとって、伴副社長との懇談が知見を広めるよい機会となり、勉強になりました。

独日協会のパローグ＝クラウス輝子会長は、フォルクスワーゲン社での研修、市長との対談、学校への招待、ヴォルフスブルクスタジアムへの招待など、この派遣に多大なご協力をしていただきました。とても明るく快活な方で、現地の方と交流する際、様々な手助けもしてくださいました。私も日本のために、パローグ会長のように海外で活躍できる人材になろうと思いました。

この海外派遣は、本当に多くの方々のご協力で、実現したと実感しました。素晴らしい体験をさせていただいたことに感謝しています。人は人とのつながりを大事にしていくことで、大きな事業が成し遂げられるということを、この派遣事業で改めて感じる事ができました。



「ドイツ」で学ぶ仕事術

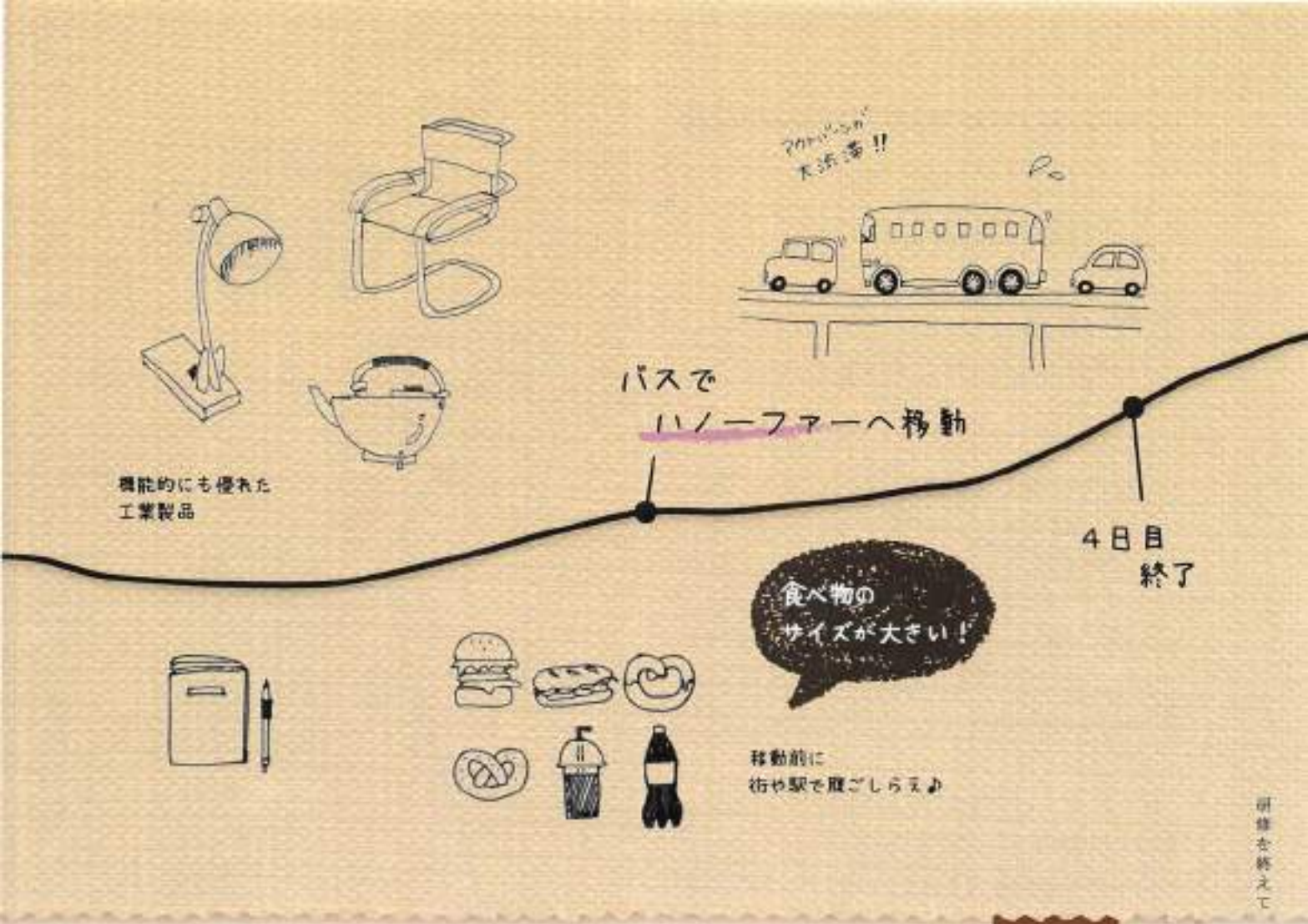
荒田 大雅　名古屋市立工芸高等学校 電子機械科 3 年

今回の研修を通して、私は一生経験できない多くの体験をすることができました。特にフォルクスワーゲン社での研修は、忘れられないものになるとともに私の意識を大きく変えたものになりました。

デュアルシステムを使ったドイツの教育制度は、企業と学校を交互に通い、勉学に励みながら、自らの将来のために企業で実習を重ねるという大変素晴らしいものでした。私たち日本の学生からするとそのために 10 歳の頃には進路を決めるという点にも、驚かされました。

また、デュアルシステムによって磨かれた技術が大変高いことや、多くの女性が工業系の仕事に強い興味を持っていることにも驚きました。仕事に誇りを持ち、日々修練を重ねている姿は、ジャーマンクラフツマンシップそのものでした。設備は、最新のものが設置してあり、教官の指導も徹底しているところがドイツのモノづくりの根幹を支えていると痛感しました。日本もこの素晴らしい仕組みを名古屋から広げていくべきだと感じました。それほど、ドイツという国の教育方針は素晴らしものでした。

この海外派遣での体験は非現実的でありながら、全く新しい世界へ飛び込むことができました。常に新しいことへ挑戦し続ける、貪欲に吸収する力を身につけることが出来る大変貴重で有意義な体験でした。この素晴らしい研修を、将来、私が名古屋から世界へと繋ぐものづくりのリーダーとなって、協力してくださった全ての人へ恩返しを必ずします。人生を変える貴重な体験に感謝します。



「一期一会」

亀山 倫太郎 名古屋市立工芸高等学校 電子機械科3年

今回この研修に参加したことで、新しいものがたくさん見えてきました。まず、一番衝撃的だったのは、ドイツの訓練生が行っている教育システムでした。それは、日本のシステムとは大きく違い、日本の工業高校生の私から見ると夢のような場所でした。

また、今まで関心のなかったデザインやドイツの歴史を知ることで、私の目指す開発者になるために必要なことにも気づくことができました。一番私に影響を与えたのはバウハウスでの研修でした。ここはドイツのデザインについての知恵が詰まっていると事前に伺っていましたが、あまり関心がありませんでした。しかし実際に訪れてみると自分の想像とは大きく違い、展示されている物はデザインだけでなく、ものづくりをするうえで必要不可欠な極意があるように感じました。

フォルクスワーゲン社での研修は、将来ものづくりのスペシャリストを目指す私にとって、非常に貴重な体験となりました。そこでは技術・技能や知識だけではなく、ものづくりを通じた仲間の大切さ、製品に対する思い入れなど、ものづくりをするうえで欠くことのできないものを学ぶことができました。もちろん技術力は素晴らしく、今まで見たことのない大きなアームロボットが動く自動車の製造ラインを目のあたりにした時の感動は忘れられません。

私は今回の研修に参加できたことを誇りに思っています。名古屋市のドイツ研修は今年が初めてであり、フォルクスワーゲン社、ルフトハンザ航空で高校生が行う研修も世界初と伺っていたので、研修を終えた今でも胸の高鳴りが止まりません。

この海外研修は、多くの方々の協力があって実現できたと団長から伺っています。その方々のご協力に感謝し、今回の海外研修で得た知識、技術、感じたことを少しでも多くの人に伝えることに力を尽くしたいです。

新しい扉の向こうへ

寺島　敬吾
名古屋市立工芸高等学校 電子機械科３年

私は、今回のドイツ派遣のテーマとして日本との違いと、進んだ技術を学ぶことを目標としていました。

ドイツは非常に技術の向上に力を注いでいると感じました。デュアルシステムは生徒が企業に行き、訓練生として過ごしながら、学校で学習するというものです。フォルクスワーゲン社では学校を建設したり、プログラムを学ぶための設備を提供したり、技術を学ぶ環境が整っていていました。

コマツ・ハノマーグ社とフォルクスワーゲン社での実習は、自分たちよりレベルの高い実習を行っていました。ドイツの教育環境がとても羨ましく感じましたが、現在自分たちが実習で行っていることの応用だとも思いました。私は、現在の設備で今まで以上に工夫し、ドイツの技術者に負けないように努力していきたいと考えました。

優れたものをつくるためには、様々な知識を学ばなければならないということも学んだので、これからは授業だけでなく自主的に機械やプログラム、回路についての知識や、他の分野も貪欲に勉強していこうと考えています。

今回の海外研修では、将来の自分の人生について深く考えさせられました。自分は今回の経験を通して、特に精神面で大きく成長したと感じています。今回体験した、経験したことを学校生活や社会人になってからも、様々な面で生かしていきたいと考えています。

ワークショップで制作した作品

必要な力

赤木　友李夏
名古屋市立工芸高等学校 情報科３年

「なぜやるのか、どうしてやるのか考えながら動けば、自然と活躍の場が訪れる」ドイツの海外研修では様々な実習において技術を学ぶことができました。しかし、研修でその技術だけでなく考え方・発想などの力についても学びました。

特にコマツ・ハノマーグ社の伴副社長のお話は非常に感銘を受けました。「学校で学ぶより、企業などの現場で手に入れた情報の方が、社会でより使う」これは、未来はどんどん変化していき、現在学んでいることがベースでやっていけるとは限らないので、現場で得ていく知識の使用頻度が多いということです。

また、「書籍や新聞などで知見を広げることが大切」というお話を聞き、これからは新しい情報だけでなく、書籍などから過去の情報にも目を向けたり、自分とは別の考え方を知ったりしていこうと思いました。さらに、英語やドイツ語に力を入れ、日本の書籍だけでなく、海外の書籍も読む目標を持ちました。

社会人に必要な力も教えていただきました。「新しいものを生み出し、それを説得する力・よそ見をする力・行動力・責任力」というお話を聞き、私は、物事に取り組むと一直線になってしまうので一歩はずれて見ること、つまりよそ見をする力はとても大事だと思いました。

他にも「変化についていく人ではなく、変化を起こす人になる。」というお話にも感銘を受けました。新しいものを知ることはとても楽しいのですが、それも既に他人が考えたことです。私も、他人が既に考えたことではなく、自分の力で考え、世の中に変化を起こす人材になれるように頑張ります。

そして最後に伴副社長は「要はやる気」と声を張って言われました。何を始めるにしても、行動を起こすにしてもやる気がないと始まりません。その言葉はあたりまえの言葉ですが、とても大切に感じました。伴副社長はドイツの現場で働いているからこそ得た考え方を持っているので、とても有意義な懇談会でした。

伴副社長のお話を聞き、私の進むべき道がはっきりとしました。今回の NADIOS の海外研修を終えて、将来は海外で働き、常に最先端にいる人、変化を起こしていく技術者になるように努力します。

世界を知って

久保田　信永
名古屋市立工業高等学校 機械科２年

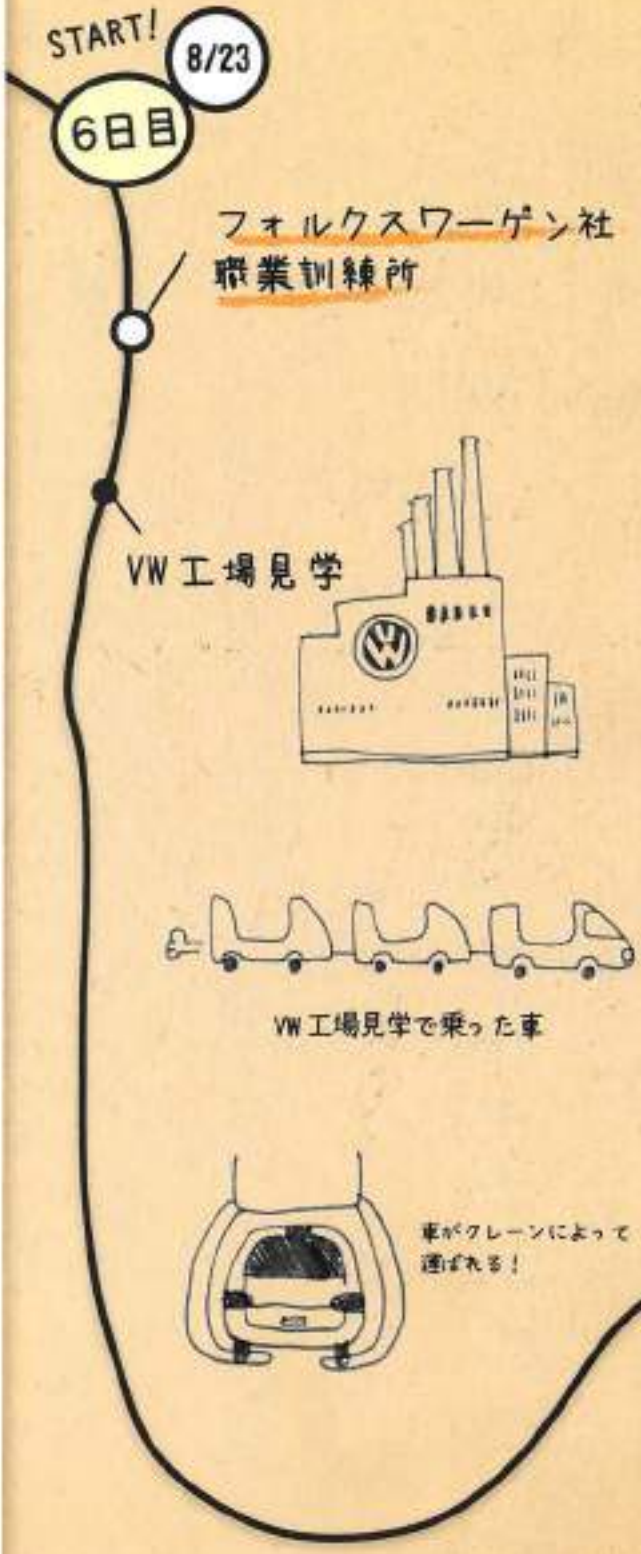
私は今まで辛いことから逃げてきたので、この研修に参加することで何かが変わると考えていました。団員に選ばれて、事前研修や語学研修に一生懸命取り組み、現地研修に臨みました。今回の海外派遣に参加して、学んだことがいくつかあります。

一つ目は、コミュニケーション能力の向上です。私は将来海外での就業を考えており、その際必要になるのがコミュニケーション能力です。今回の派遣でその能力を鍛えることができると考えました。私は自分の意見を言うことが苦手なので、ドイツ人の行動に刺激を受けました。

二つ目は、団体行動の難しさです。この派遣団も最初はまとまりがありませんでしたが、日を増すごとに一人ひとりの意識が変わり、派遣団としての自覚が出てきました。団体での行動は個人の意識だけでなく、全員の意識がまとまってようやく機能するものだということを改めて学ぶことができました。

三つ目は、世界の広さと自分の小ささです。ドイツには様々な国籍の人がいて、その中で生活していくうちに、今まで日本しか知らなかった私が海外で働きたいと簡単に口にしていたことが恥ずかしくなりました。ドイツ人は失敗を恐れず自分の意見に自信をもって発言するので、自分にはないものをたくさん持っています。そのドイツ人を前にして、自分は心も体も未熟だということが分かりました。

他にも、ドイツの街並みに感銘を受けたり、資料館などで歴史を学ぶなど、非常に貴重な経験ができました。今回学んだことを決して忘れることなく、必ず将来に生かしていきます。そして、今回の派遣にご尽力承りましたすべての皆様に感謝の気持ちを伝えたいと思います。



パローグ会長といっしょに

6日目
終了

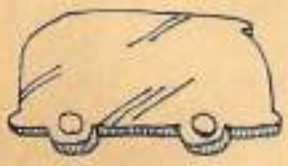
お世話になった
パローグ＝クラウス輝子さん

旗にあるマーク

ヴォルフスブルク
モアース市長さん

ヴォルフスブルク市役所
市長表敬訪問

職業訓練所



いただいたプレート

新たな自分を追い求めて

冨山　恵吾

名古屋市立工業高等学校 自動車科２年

私がドイツ派遣に参加しようと思った理由は、今までの自分を変えようということです。はじめはメンバーとうまくやっていけるか不安でしたが、研修が進み自然に自分も心を開くことができました。

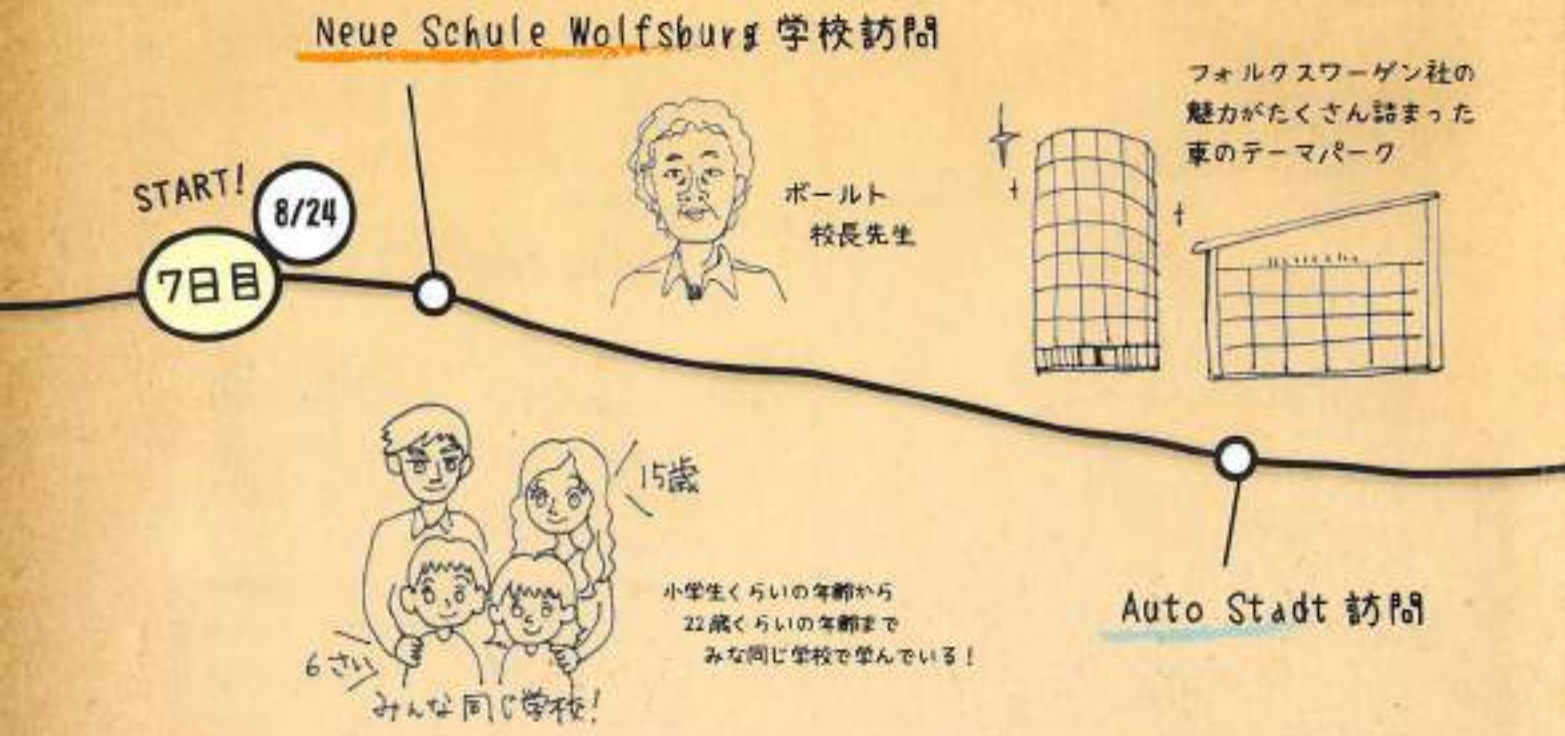
今回の海外派遣は、フォルクスワーゲンでの研修があり、高校生として世界初の試みだと聞いてとても興奮しました。また、私は自動車科であり、勉強をするチャンスだと感じました。

毎回、研修を重ね、団員の発表を見て、どんどん自分たちがとても大きなプロジェクトに関わっているのだと気付いてきました。

到着の翌日からは本格的に研修がはじまり、ルフトハンザドイツ航空では飛行機の壮大さ、設備などに大変驚きました。コマツ・ハノマーグ社では、伴副社長の貴重なお話や訓練生と交流を通して、ドイツ人の技術力の高さに驚きました。そして、何と言ってもフォルクスワーゲン社での実習は非常に有意義なものでした。工場内の視察では、事前研修で視察したトヨタ自動車の施設設備と比較したり、ドイツの自動車工場の素晴らしさ思う存分見ることができました。訓練所の訓練生たちも、非常に高いレベルの技術・技能を持っていることに驚きました。

現地校での授業参加やホームスティも非常にいい経験になりました。このような貴重な体験をさせていただき本当にいい経験になりました。今後の、自分の技術・技能の向上に必ず役立つものだと考えています。

カリーブルスト
美味しかった！



衝撃の240時間

古川　達也
名古屋市立工業高等学校 自動車科２年

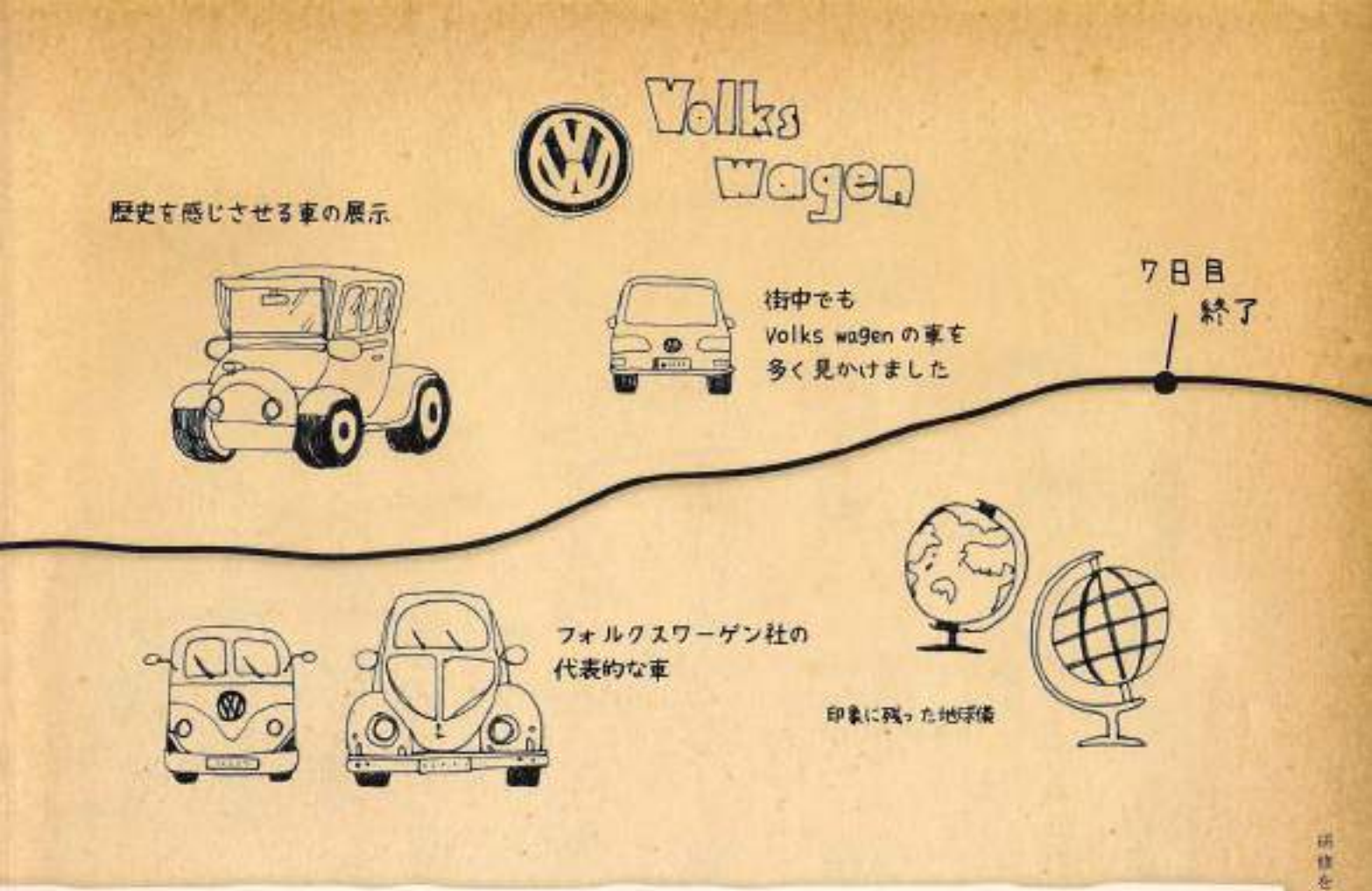
ドイツ派遣での私の目標は、名古屋の将来の産業の役に立つ知識を、海外での経験を日本に持ち帰り伝達し、来年度のドイツ海外派遣につなげていくことです。この目標を達成するために、ドイツで様々な視察や実習を行い、現地の方々や、訓練所や学校の生徒たちと交流を深めました。特に３つのことが非常に印象に残っています。

一つは、日本で調べたことと実際に体験したことの違いです。例えばザクセンハウゼン強制収容所については、現地の人の考え方や思い、収容された人たちの環境や思いを綴った手紙、遺品の多くを目にすることで、ホームページや書籍では感じることができないものでした。

二つ目はコマツ・ハノマーグ社での体験です。私たちはコマツ・ハノマーグ社で伴副社長とディスカッションする機会を得ました。伴副社長は、「無駄なものは無駄、必要なことは必要」と言える自分の意志を貫き通すことが大事であり、その際に上司とぶつかり、その人たちが壁になることがあるので、その壁を乗り越える力を備えることが大事だと教えていただきました。私が、上司を納得させ壁を乗り越えるにはどのような方法があるのか質問したところ、「子供のように何度も言い続けるのではなく、相手にどんな利益、損害があるのかをしっかり説明することが大事」と教えていただきました。当たり前のことだと思いましたが、よく考えてみると本当に言葉の力だけで相手に納得してもらえることは難しいことだと感じました。

三つ目は、10 日間の海外研修で日本の良さを改めて感じたことです。食事もおいしく、治安もいい、安全で住みやすい国、地域であると改めて感じました。

他にも得難い多くの体験をしました。今回学んだことを決して忘れることなく、必ず将来に生かしていきます。そして、この経験を広く地域に還元していきます。



新しい発見

服部　真季
名古屋市立工業高等学校 環境技術科２年

ドイツで研修は、五感（視・聴・嗅・味・触覚）のすべてを総動員させて感じ取るように努力しました。

まず、景色が日本と全く違いました。街の景色は非常にきれいで、日本とは違い、統一感がありました。また、ドイツ料理の香りは経験したことのない香りで、味は日本より濃く感じました。普段の日本食と違って慣れない料理ばかりでしたが、ケーキや本場のソーセージは、とても美味しかったです。

企業研修では、私の学科では行わない研修を行いました。コマツ・ハノマーグ社では、板金実習を行い、フォルクスワーゲンアカデミーでは、溶接作業、電気配線、プラスチック成型などの実習を行いました。

ドイツの生活を通して感じたことは、ドイツ人の積極性です。ドイツの学生との意見交換では、自分の意見を主張する学生が多く、私も見習い、自分の意見をしっかりと主張していくべきだと感じました。また、環境問題も日本より意識が高いと感じました。スーパーで買い物をした時に、袋を買う人は全くおらず、マイバックを持っている人がほとんどでした。ドイツの街はごみ箱が設置してあり、ごみを道に捨てる人も少ないため、日本よりきれいでした。

日本のいいところも発見することができました。例えば、日本ではハンカチで手を拭きますが、ドイツ人は紙を使います。水についても、日本の水はおいしいと思います。ドイツの水は硬質であり、飲んだ時にのどに引っかかるような感じでした。日本で水道の蛇口をひねると、軟らかくおいしい水が飲めます。改めて、日本は恵まれていると感じました。

ドイツに訪れて、実際に自分で見たり聞いたりすることにより本当によい勉強になりました。今後は、海外派遣の成果を、いろいろなところで還元していきたいと考えています。

日本との文化の違いを体験して

岩城　諒汰郎
名古屋市立工業高等学校 機械科３年

ドイツ派遣で実際に見たことや体験したこと、お会いした方々との交流は私の人生の中でも最も有意義なものとなりました。

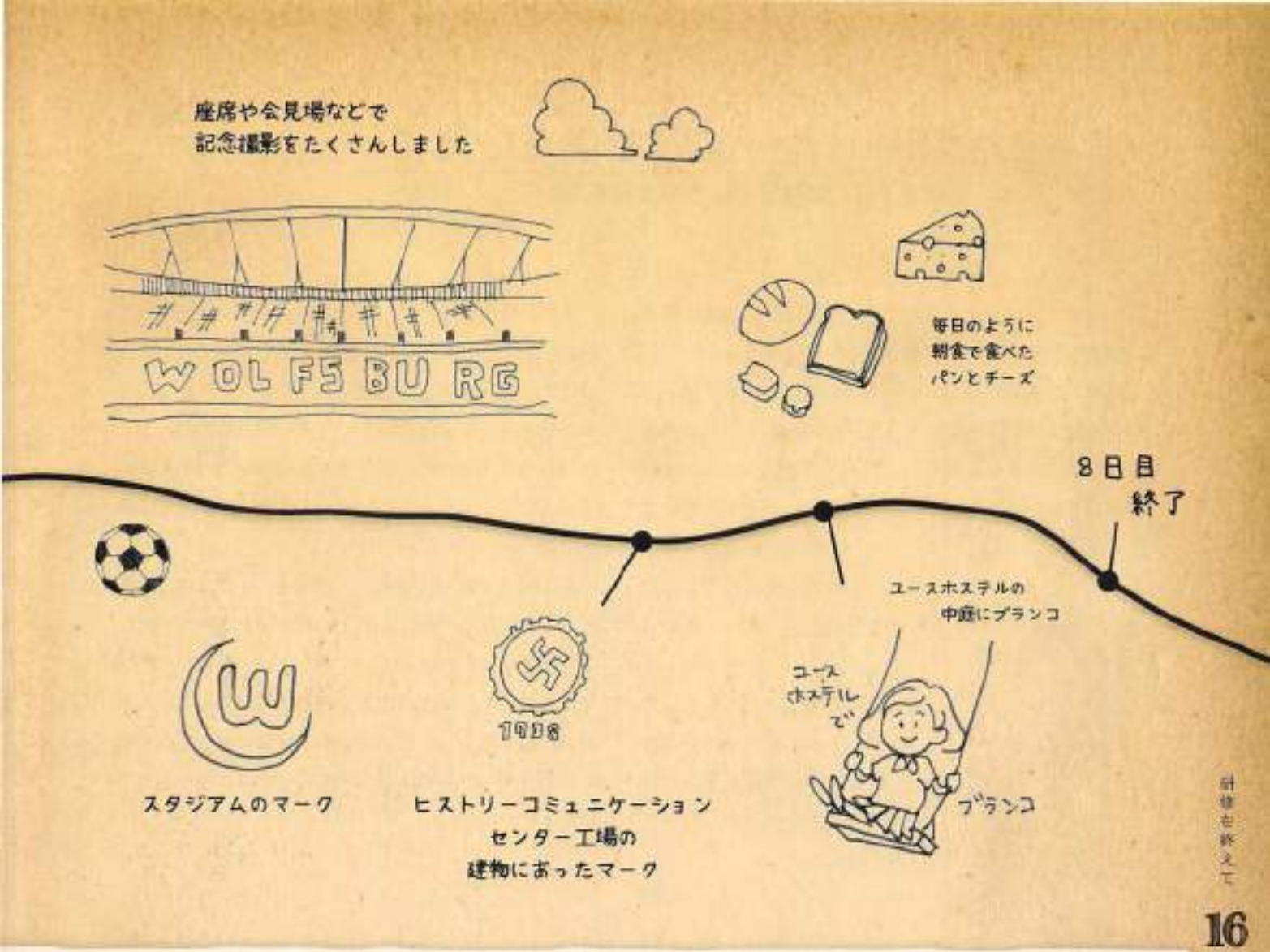
ドイツの歴史的建造物等には感動しました。特に、ザクセンハウゼン強制収容所では、収容者への非人道的な行いを知りました。またベルリンの壁、ブランデンブルク門の史跡もドイツの負の遺産として、私の心に残りました。

また、体験で最も印象に残っているのが、コマツ・ハノマーグ社、フォルクスワーゲン社内の職業訓練学校の訓練生との共同実習です。電気配線では、日頃学校で使用している工具とは違うもので、使いやすく非常に作業がしやすかったです。

溶接についても私の学校で2種類しか行っておらず、訓練校では5種類見せていただき、大変勉強になりました。プラスチック成型などにも関わらせていただき、大変充実した実習の体験となりました。

現地校でも、一緒に授業を受けることができました。数学や芸術の授業では、グループディスカッションをしながら授業を進めていくスタイルで、自分も英語、ドイツ語を駆使して参加しました。ニュースクールでは、小さな子供たちにノギスの製作を指導しました。子供たちが非常に積極的に参加してくれたことが非常に嬉しかったです。

ドイツでは、いろいろな方々とお会いすることができました。特に日本大使館の八木大使、コマツ・ハノマーグ社の伴副社長、ヴォルフスブルク市のモアース市長や独日協会のバローグ会長には、大変お世話になりました。ドイツの海外派遣事業は、こういった方々のおかげで、実施できたのだと思います。派遣団の一員になれたことをとても誇りに思っています。このような経験はおそらく二度とないと思うので、今回得られた知識や経験を今後様々なところで還元していきます。



尊敬する人

服部　翔真
名古屋市立工業高等学校 機械科３年

私はドイツ海外派遣を終えて、物事の考え方が大きく変わりました。それはコマツハノマーグ社の伴副社長のお話を聞いたからです。

伴副社長のお話で、「物事はまず『なぜやるのか』ということから考える」と聞いた時、最初はよくわかりませんでした。しかし、「『なぜ』ということから考えることによって、その物事の必要性や重要性に気づかされる」と聞き、とても共感しました。私は今まで、様々なことに「なぜこんなことをやる必要があるのか」と面倒に思うことはあっても、「なぜやらなければならないのかと」考えることができなかったので、非常に新鮮な気持ちで聞き入ってしまいました。今では何事も「なぜやるのか」と最初に考えるよう心掛けています。私の考え方を根本から変えた伴副社長との懇談会は、貴重な体験となりました。

フォルクスワーゲンアカデミーでは、訓練生の技術力の高さに驚かされ、良い刺激をもらいました。工業高校生として、また、これから社会に出て働く者として、私も努力していかなければならないと実感しました。これからの人生で、ドイツでの経験をもとに自分を見つめなおし、将来、伴副社長のような志を持ち、世界で活躍する社会人になるように、日々精進していきます。

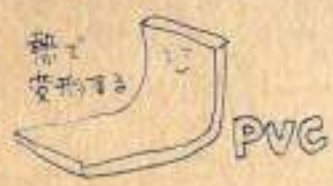
Ingenieur～世界で働くために～

安藤 翔太　名古屋市立工業高等学校 情報技術科３年

コマツ・ハノマーグ社では、伴副社長と直接お話をさせて頂き、良い技術者であるためにどうしたらいいのか、社員から信頼してもらい、動かすためにはどうすればいいか等を伺いました。伴副社長は、「技術者として常に先を見ながらも、現在を見て自分たちには何が足りないのかを常に考えていくこと」「社員を動かすためには、コミュニケーションをとり、どうしてほしいかを考え、相手に自分の意見を言うこと」また、「相手の言うこともしっかりと聞いてあげること」とおっしゃいました。この言葉に私は、非常に感化され、伴副社長のような素晴らしい人になりたいと思いました。

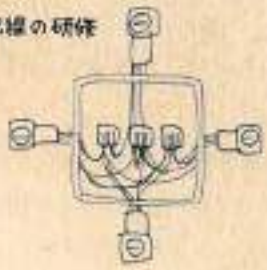
また、訓練生に、どうしてコマツ・ハノマーグ社で訓練しているのか尋ねたところ、「自分が学びたい技術がここにあったから」と回答されました。ドイツの将来を支える技術者になるという思いが、私にひしひしと伝わってきました。私もその気持ちに感化され、彼らに負けない技術を身につけて、世界で通用する技術者になりたいと考えました。

私は現在、3D モデル作成の学習をしています。卒業後はその分野で就業し、技術・技能を身に着けた後は、母校に戻り技術者の育成に力を注ごうと考えています。そのためにも、今回の海外派遣の経験を生かして、新新な発想力をもって日本の産業の発展に大きく貢献していくために、貪欲に技術・技能の習得に取り組んでいきます。



素材を変形させる研修

コード配線の研修



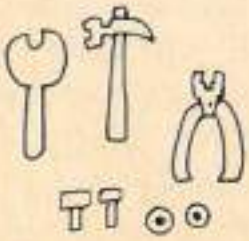
START!

8/26

9日目

フォルクスワーゲン社
職業訓練所研修

訓練所の研修生



研修では工具類を
たくさん使用しました

協力共栄～明るい未来を目指して～

内木 朝子　名古屋市立工業高等学校 情報技術科３年

ドイツの歴史については、ザクセンハウゼン強制収容所を始め、ベルリンの壁やブランデンブルク門などを視察しました。ドイツ人だけではなく、私たちも忘れてはならない負の歴史と向き合えた気がしました。

コマツ・ハノマーグ社では、板金の実習を行いました。私の学科では行わない実習で、とても興味をもって取り組むことができました。１枚の平板がだんだんと形になっていくことに非常に充実感がありました。訓練生も、聞き取りやすくゆっくりと、身振り手振りを交えて話しかけてくれました。

フォルクスワーゲン社での３日間の工場見学や実習も、非常に有意義なものでした。訓練生は、私たち同年代にもかかわらず、非常にレベルの高い作品を制作していました。訓練生との実習は、見るものから体験するものすべてが珍しく、中でも私が一番印象に残った実習は溶接実習でした。フォルクスワーゲン社での見学、実習は一生忘れることができない非常に良い経験になりました。

バウハウス資料館や技術博物館では、ドイツのデザイン、技術の歴史も学びました。Neue Schule Wolfsburg では、現地の学生と交流させていただきました。私たちと比べ関心や意欲が高く、日本人との考え方の違いがよく分かり、見習わなくてはいけないところが多くありました。

短い時間でしたが、ドイツの家庭にも訪問させていただきました。英語やドイツ語がうまく使えませんでしたが、一生懸命に自分の気持ちや言いたいことを伝える姿勢をしっかり見せれば、言語は違っても伝えたいことはしっかり伝えることができるということが分かりました。

このような、ドイツ派遣を実現してくれた方々に感謝するとともに、この派遣で得たものを、様々なところでしっかりと還元していきます。

ガス溶接研修

家庭訪問

おとぎ話に出てくるような素敵なお家に訪問

９日目 終了

明日は帰国の途に

研修中にみた溶接加工されたもの

言葉がなかなか通じず会話に苦労！
美味しい夕食をご馳走になりました！

Wendepunkt von Leben 人生のターニングポイント

山田 智大　名古屋市立工業高等学校 情報技術科３年

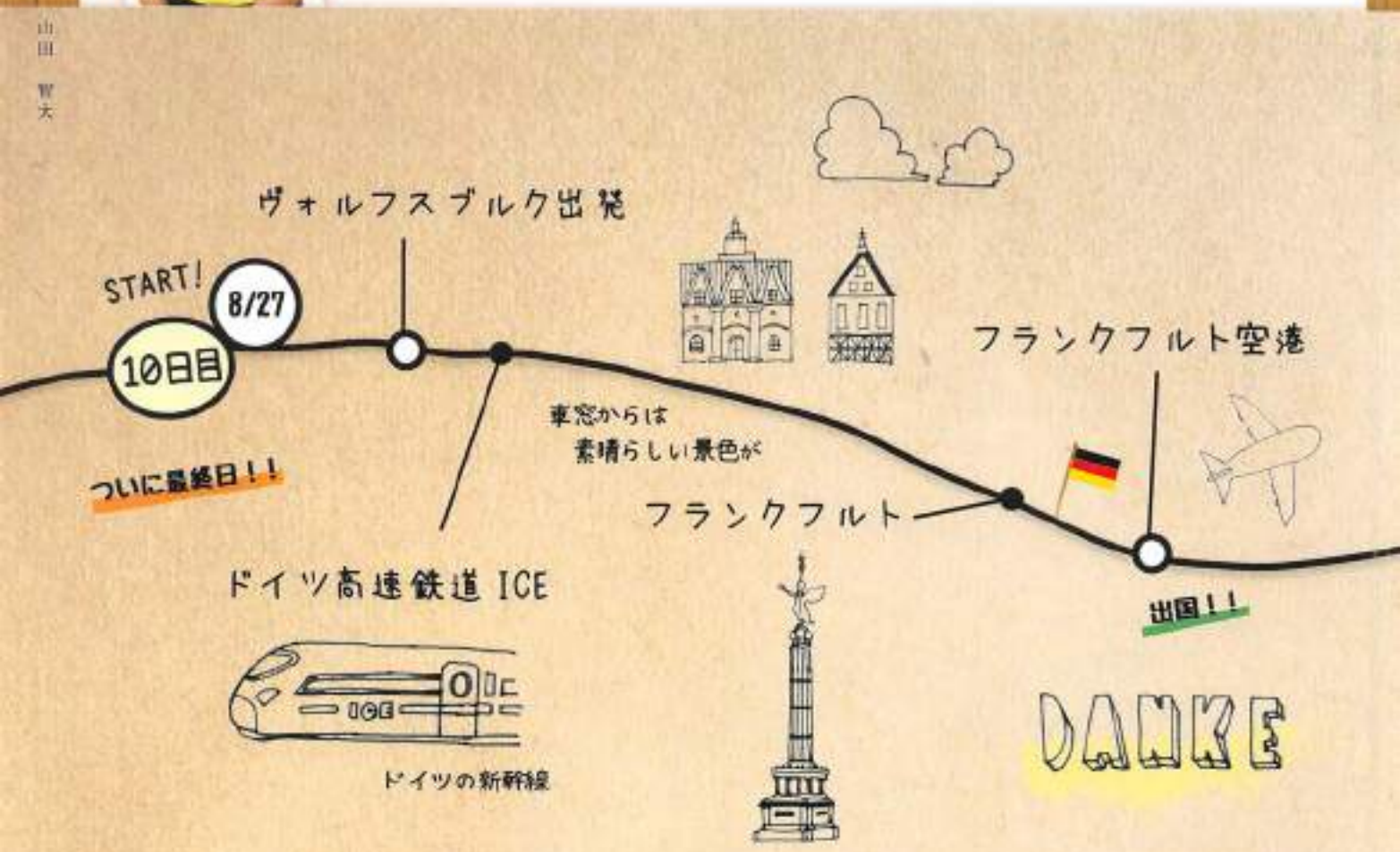
約三か月の事前研修を経て、十日間のドイツ派遣は、私の人生の中で、最も素晴らしいものとなりました。ドイツ派遣の紹介があった時は、研修についていけるか、外国人とのコミュニケーションがとれるか自信が持てず、参加には消極的でした。しかし、このチャンスを逃さず掴み取り、「自分の人生を変えるきっかけにしたい」これが、私のドイツ派遣参加に対する決意でした。

ドイツ派遣では、とても貴重な経験をさせていただきました。ドイツ派遣で経験したことの全てが、初めてで、驚くことばかりでした。研修を重ねるにつれ、積極的に行動を起こす努力をしました。その結果がフォルクスワーゲン社での最後の挨拶スピーチです。「こんなに素晴らしいスピーチはなかなか聞けない」と言われた時、私はしっかりと結果を残すことができたと思いました。

フォルクスワーゲン社の訓練学校や Neue Schule Wolfsburg での研修では、現地の学生と交流をする機会をいただきました。幼いころから自分の将来のことを考えていて、現地の学生は外見だけでなく中身も私たちよりも大人に感じました。彼らを見て、自分がいかに甘い考え方で生活をしていたかを実感しました。自分が世界で働くためには、自分の考えを持ちながら、時には、柔軟な考えを持ち、いろいろな技術を貪欲に学ぶことだと確信しました。

ドイツでは「発言しないとその場にはいないものとみなされる」ことを知り、質疑応答の場面や意見を述べる場面で積極的に発言をしました。

この研修を通じて、様々な経験と教訓を得ました。そして、この研修は確かに自分の人生を変える良いきっかけになりました。積極的に行動を起こす事だけでなく、小さかった自分の価値観、世界観がとても広がりました。私が日本ではあたりまえだと考えていたことが、海外では違うということも知りました。この経験によって、さらに海外で活躍したいという決意がさらに固まりました。進学してもこの経験を忘れず、積極的に行動し、様々な技術や知識を貪欲に吸収していきます。



世界を体験し、変われた私

祖父江 学人　名古屋市立工業高等学校 環境技術科３年

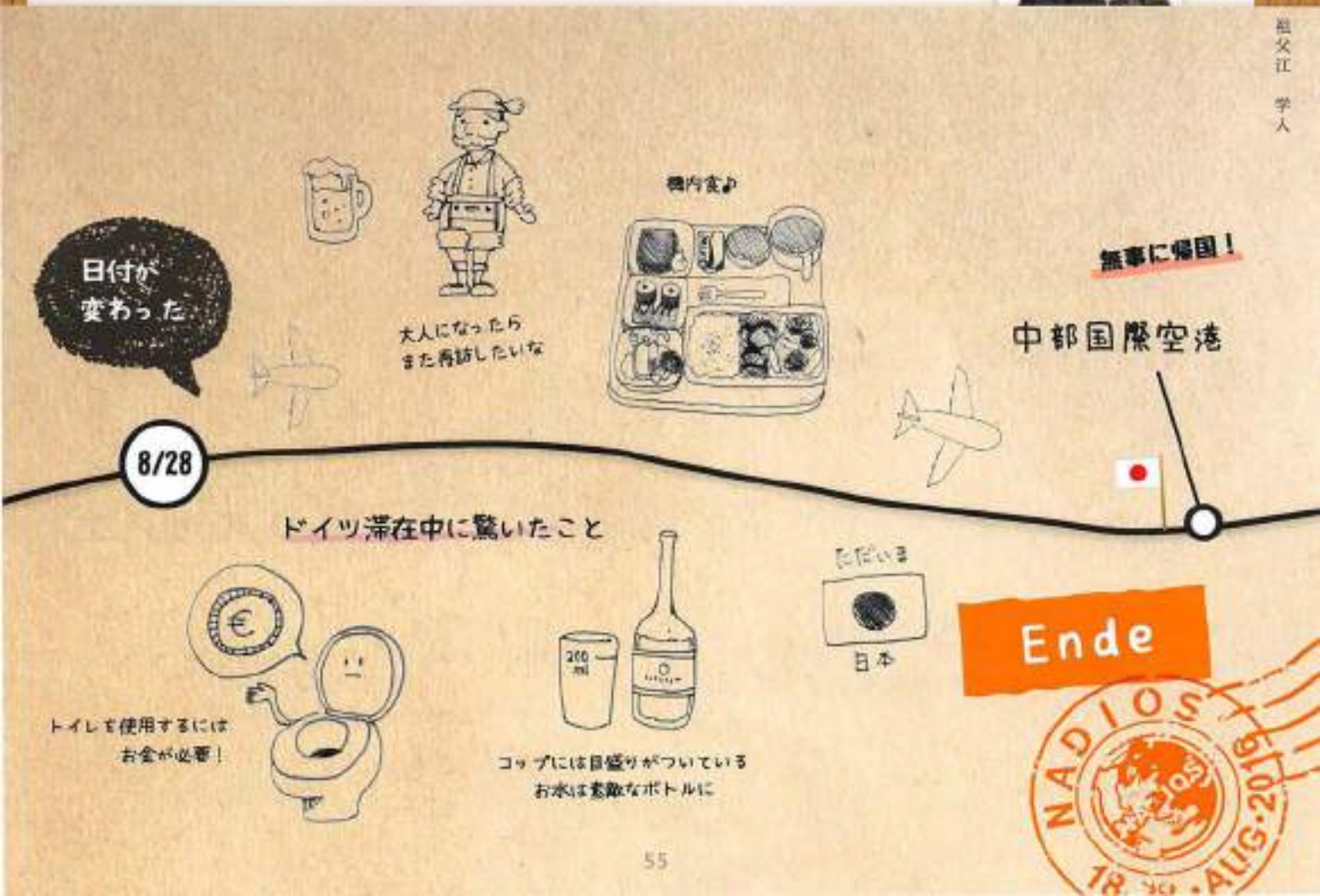
私はこのドイツ派遣で様々なものを得たと共に、将来の夢をつかみました。

私は前に出るタイプではなく、消極的なタイプです。このドイツ派遣に応募した動機は、消極的な性格を変えられると考えたからです。ドイツ語の先生から「外国では自分の意見を言わないとその場にいないと同じ」と聞いた時には少し落ち込んでしまいました。しかし、海外派遣での様々な経験から、どんな時にも積極的に質問や意見をすることができるようになりました。自分から積極的に発言する気持ち良さ、少し気づくのが遅かったかもしれませんが、とても大きなものを海外派遣で得ることができたと思います。

ドイツ派遣で見つけた夢は外国で活躍して、世界と日本との懸け橋になる、というスケールの大きな夢です。この夢を与えてくださった方は、ドイツで大変お世話になった、独日協会会長のバローグ＝クラウス輝子さんです。私は事前研修で、バローグさんのことを調べました。日本人ですごい方がいらっしゃるのだと感心していましたが、実際にお会いすると、更に素晴らしい方だと感じました。振る舞いがとても上品であり、芯がしっかりとして堂々としているのですが、ユーモアもあり私の理想とする方でした。今回のフォルクスワーゲン社での多くの体験はバローグさんのおかげで実現できたという話を聞いて、私はとても強い憧れを抱き、バローグさんの様な存在になり、世界で活躍しようという夢を持ちました。

バローグさんとのお別れの際に、「私もバローグさんのようになりたい」と告げたら、「あなたならなれるよ！」とおっしゃってくださいました。この言葉を忘れずに私は絶対にこの夢を実現させようと心に決めました。

今まで夢を持たずに生活してきた私が、このような夢を持てたことに自分でも驚いています。私がこのように変われたのは、全てドイツ派遣のおかげです。ぜひ、この経験を将来に役立てるとともに、社会にも貢献できるように頑張ります。



編集後記

内田裕二　Yuji UCHIDA

名古屋市立工業高等学校
Technische Höhere Schule

ドイツの生活習慣、文化、歴史に対する考え、経済情勢、産業を支えるシステムの役割、労働など、どれもが日本の発想とは違っていました。今回の研修を通じて、ドイツと日本の良い面が理解できました。

日本の常識が通じない国でも、工夫や行動力によって道は開けること教えられました。また、日本の方々の現地での活躍に接し、団員たちは心を揺さぶられ、自身の生き方を再発見する機会になったようです。

私たちは、ドイツ研修に向け「Neugierig 知ることに貪欲であれ　」～未知の世界へ飛び込め！未来のスペシャリスト～をテーマにそれぞれの研修に取り組みました。この研修は、団員がこのテーマのように異国の地に行き、貪欲に行動することで自分たちの未来を切り開いていく自信を持つことを学びました。今後は、国際社会で自らが中心となり、日本の産業発展のためにこの経験を生かし活躍できる人間になってほしいと期待をしています。そして、この研修がさらに発展を続けてドイツとの交流が益々盛んになり、両国の技術・技能の交流と発展につながっていくことを期待しています。

NADIOS

名古屋市立工業科高校生ドイツ派遣報告書

2016

発行　平成29年1月20日
編集　名古屋市立工芸高等学校
　　グラフィックアーツ科
印刷　社会福祉法人名古屋ライトハウス
表紙　名古屋市立工芸高等学校
　　グラフィックアーツ科3年　牧　弥生

Nagoya Deutschland
Industrielle Oberschüler Seminar 2016

名古屋市教育委員会

NAGOYA
JAPAN